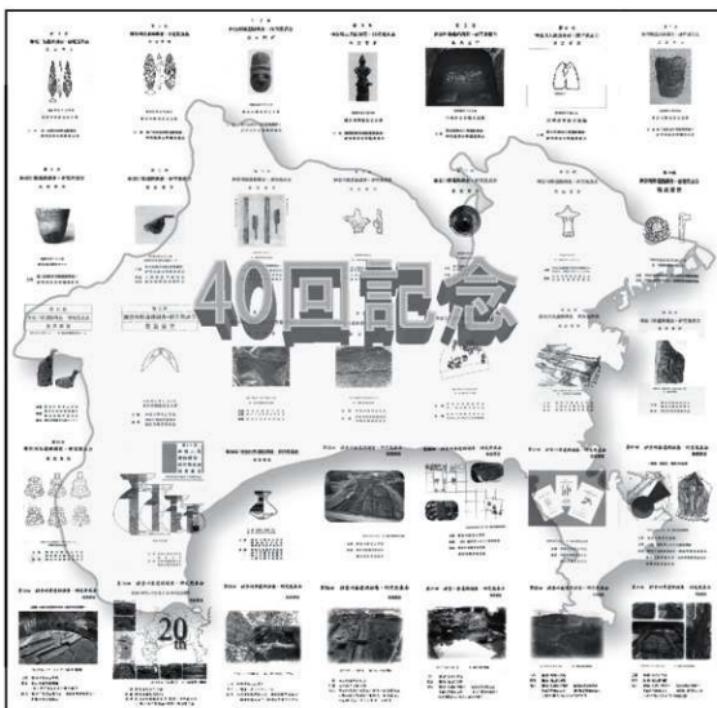


第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表要旨



2016年11月13日（日）

於：横浜市歴史博物館

主催 神奈川県考古学会

共催 横浜市歴史博物館

後援 神奈川県教育委員会 横浜市教育委員会

川崎市教育委員会 相模原市教育委員会

公益財団法人かながわ考古学財団

表紙：過去の発表要旨

裏表紙：瓦塔 東京都東村山市教育委員会

『瓦塔調査報告書』より転載

開催要項

開催日：2016年11月13日（日）会場：横浜市歴史博物館 講堂

40回記念

10:00～10:10 開会挨拶 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之

調査・研究発表

10:10～10:40 秦野市

蓑毛小林遺跡

(公財)かながわ考古学財團 吉澤 健氏

10:40～11:20 小田原市

天神山遺跡 第Ⅲ地点

玉川文化財研究所 戸田哲也氏

11:20～11:50 相模原市

国指定史跡川尻石器時代遺跡

相模原市教育委員会 中川真人氏

11:50～13:10 昼休み

13:10～13:40 平塚市

竹之内遺跡 第5地点

北金目塚越遺跡 第18地点

大成エンジニアリング(株) 山内淳司氏・市川康弘氏

13:40～14:10 横浜市

下飯田林遺跡 第2地点

玉川文化財研究所 西野吉論氏

14:10～14:50 鎌倉市

宝積寺跡・天神山下城遺跡

武相考古学研究所 金森弘晃氏

14:50～15:00 休憩

15:00～15:30 川崎市

槁樹郡衙跡 [千年伊勢山台遺跡]

川崎市教育委員会 栗田一生氏

15:30～16:00 伊勢原市

上柏屋・秋山上遺跡 第2次調査

上柏屋・秋山遺跡

(公財)かながわ考古学財團 村松 篤氏

16:00～16:30 秦野市

横野山王原遺跡

(公財)かながわ考古学財團 天野賢一氏

16:30～16:40 閉会挨拶

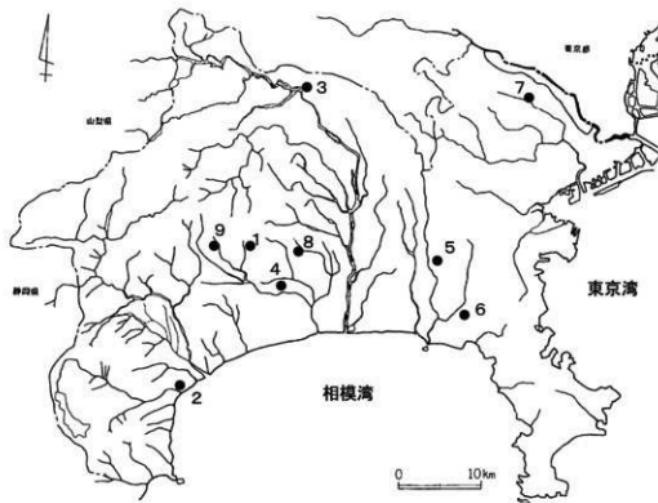
神奈川県考古学会 副会長 中村若枝

<図書交換会> 時間：10:15～15:15 会場：横浜市歴史博物館 研修室

目 次

<調査・研究発表>

1. 秦野市	養毛小林遺跡	—秦野市の槍先形尖頭器製作址—	3	
2. 小田原市	天神山遺跡第Ⅲ地点	—縄文時代中期から後期の集落と墓域の調査—	9	
3. 相模原市	国指定史跡 川尻石器時代遺跡	—縄文時代後・晚期集落の調査—	15	
4. 平塚市	竹之内遺跡第5地点	北金目塚越遺跡第18地点	—初の勾玉出土—	21
5. 横浜市	下飯田林遺跡第2地点	—弥生時代後期後半の集落跡—	27	
6. 鎌倉市	宝積寺跡・天神山下城遺跡	—山頂から一括廃棄状況を示す瓦塔の出土—	33	
7. 川崎市	橋樹郡衙跡〔千年伊勢山台遺跡〕	第16~20次調査 —平成27年度橋樹官衙関連遺跡群確認事業の成果—	37	
8. 伊勢原市	上柏屋・秋山上遺跡第2次調査	上柏屋・秋山遺跡 —縄文時代後期前半の集落と中世~近世の遺構群—	43	
9. 秦野市	横野山王原遺跡	—秦野地方の富士山宝永大噴火の被害と復興—	47	
附.	神奈川県遺跡調査・研究発表会	発表遺跡一覧(第1~40回)	53	



図中番号は上記 調査・研究発表 の目次頭の番号と一致

秦野市 蓑毛小林遺跡
— 秦野市の槍先形尖頭器製作址 —

よしだわ つよし
吉澤 健

所在 地	秦野市蓑毛 39番地ほか
調査機関	公益財団法人 かながわ考古学財団
調査担当	加藤久美・吉澤 健
調査原因	新東名高速道路建設事業
調査期間	2013年12月1日～継続中
調査面積	8,477 m ²

1. 遺跡の立地

蓑毛小林遺跡（秦野市No157）は小田急小田原線秦野駅から北方3.6km、丹沢山地のふもとの秦野盆地北東部に位置する。本遺跡は北側丘陵部から続く南向きの緩斜面に立地しており、西側100mにはヤビツ峠付近を源流とする金目川が、東側数mには小蓑毛沢が南流する。

本遺跡から金目川をはさんで西側約250mには東田原中丸遺跡が、小蓑毛沢をはさんで東側約100mには寺山中丸遺跡が位置しており、かながわ考古学財団により調査が実施された。また、寺山中丸遺跡の東側、本遺跡から約200mには現在発掘調査中である寺山角ヶ谷戸遺跡が近接している。

今回報告する旧石器時代の遺物は、本遺跡と寺山中丸遺跡とで確認された。秦野市内ではローム層の堆積が厚く、これまで旧石器時代の遺物がまとまって発見された遺跡は秦野盆地南東部の太岳院遺跡のみであった。現時点では、本遺跡のB2U層から出土した遺物群が秦野市内最古の事例である。

2. 調査に至る経緯と調査経過

本調査は中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設事業（秦野市蓑毛地区）に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査である。このため中日本高速道路株式会社から委託を受け、公益財団法



第1図 遺跡位置図 (S=1/10,000)

人かながわ考古学財団が2013年12月より発掘調査を開始し、現在も継続中である。調査は工事用道路部分から開始され、現在は本体工事範囲の調査を実施している。

3. 調査の概要

平成27年度末までに調査が実施された面積は8,477 m²であり、古墳時代を除く近世から旧石器時代までの遺物や遺構を検出した。しかし、縄文時代から近世の時期に該当する遺物、遺構の数はともに少量である。また、本遺跡に隣接する寺山中丸遺跡、寺山角ヶ谷戸遺跡では奈良・平安時代、縄文時代の住居址が検出されているが、現在のところ本遺跡では1軒も検出されていない。後述するが、この点については土砂災害による影響の可能性があり、土石流とみられる痕跡が遺跡中央部と西端部で複数確認されている。これらの明確な時期は不明であるが、層位や遺構の前後関係、わずかに出土した遺物内容から、旧石器時代、奈良・

平安時代から近世にかけて、そして近世以降のもとの推測される。仮に住居址のような遺構が存在したとしても、遺構や遺物は押し流されてしまつたか、あるいはこうした被害を受けやすいという状況を忌避して住居を構築しなかった可能性が考えられる。

近世～奈良・平安時代

近世の遺構としては畝状遺構13箇所、溝状遺構15条、土坑92基（うち土坑墓48基）を検出した。奈良・平安時代遺構としては円形土坑89基、畝状遺構（扇）やピットを検出した。これらの時代に帰属する出土遺物はわずかであり、現在のところ住居址は検出されていない。奈良・平安時代のピットには掘立柱建物とみられる配置も見られるが、明確ではない。こうしたことから奈良・平安時代～近世にかけては、本遺跡は耕作地として利用されていたと考えられる。

弥生時代・縄文時代

弥生時代の遺構としては土坑19基（うち陥し穴12基）、ピットを検出したが、遺物は出土していない。縄文時代の遺構としては土坑66基（うち陥し穴51基）、埋甕1基、ピットを検出した。住居址は検出されず、出土遺物量も多くはないが、後期の土器片集中箇所や、早期～前期と考えられる黒曜石の石器製作場が確認された。

現在の地形は比較的平坦な緩斜面であるが、ローム層上面では起伏のある地形であったことが確認された。遺跡東端部に南北方向の痩せ尾根状地形があり、その東側は小蓑毛沢に向かって傾斜している。西側は南西方向に緩やかに傾斜し、遺跡西端部で再び高くなったのち、金目川に向かって傾斜する地形になっている。この地形は弥生時代まで存在し、この時代には地形を利用して陥し穴獵を行った狩場であったと考えられる。

旧石器時代

43か所の調査坑とトレンチを1箇所調査した。大半の調査坑ではB0層相当層で土石流によって堆積したとみられる、拳大から人頭大の亜角礫が

大量に検出された。これらの調査坑は先述の谷状地形に位置し、一部ではL2層・B2L層相当層でも同様の痕跡が確認された。このことから旧石器時代には谷状地形に向かって複数回の土砂災害があったことが推測される。一方、尾根上に位置する2箇所の調査坑でL1H層から砾と剥片が出土した。このためこれらの調査坑を拡張して本格調査を実施したところ、南側の調査坑（調査坑37）で「L1H層下層～B1層上層」と「L2層下層～B2U層」との2面で膨大な量の石器が出土した。以下、この両者の概要を報告する。

L1H層下層～B1層上層

この遺物群を調査した結果、調査坑37を395mまで拡張することとなり、石器出土点数は29,912点に及んだ。大半は碎片であり、東部分のブロックでは厚さ約1mにわたって濃密な分布を見せた。製品は槍先形尖頭器のみで、未製品、欠損品を含め250点である。その大半はガラス質黒色安山岩製であるが、黒曜石、凝灰岩製も多数含まれている。調査中のため分析はこれからになるが、使用された黒曜石はほとんどが信州産のものであると思われる。長さ3～5cmの小型のものが比較的多く、両面加工、片面加工の両方が存在する。調査範囲の南部分には尖頭器の素材剥片と考えられる、長さ10cm程の大型剥片がまとまって出土し、碎片と大型剥片で集中箇所を異にしている状況が確認された。一方で、槍先形尖頭器の出土状況は全体的に散漫で、碎片集中箇所からも剥片集中箇所からも出土している。現在のところ、この遺物群には石核は認められず、黒曜石製の大型剥片も認められなかった。これらの石器には多量の炭化物が付いており、5～6箇所のブロックを形成する。加えて砾群3基と炉址1基を検出した。

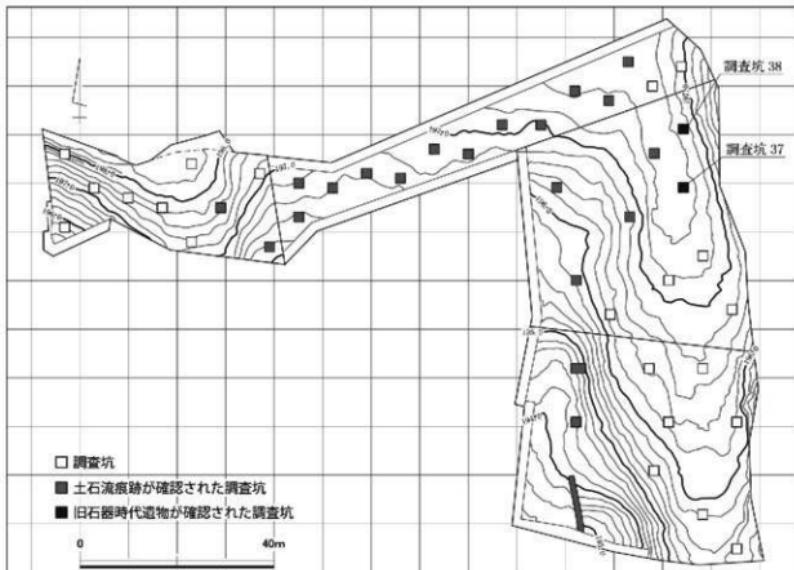
L2層下層～B2U層

土層確認のため、拡張した調査坑37の中央部に調査坑を設定して掘削したところ、約1m下方のB2U層上層で黒曜石の剥片と多数の砾が出

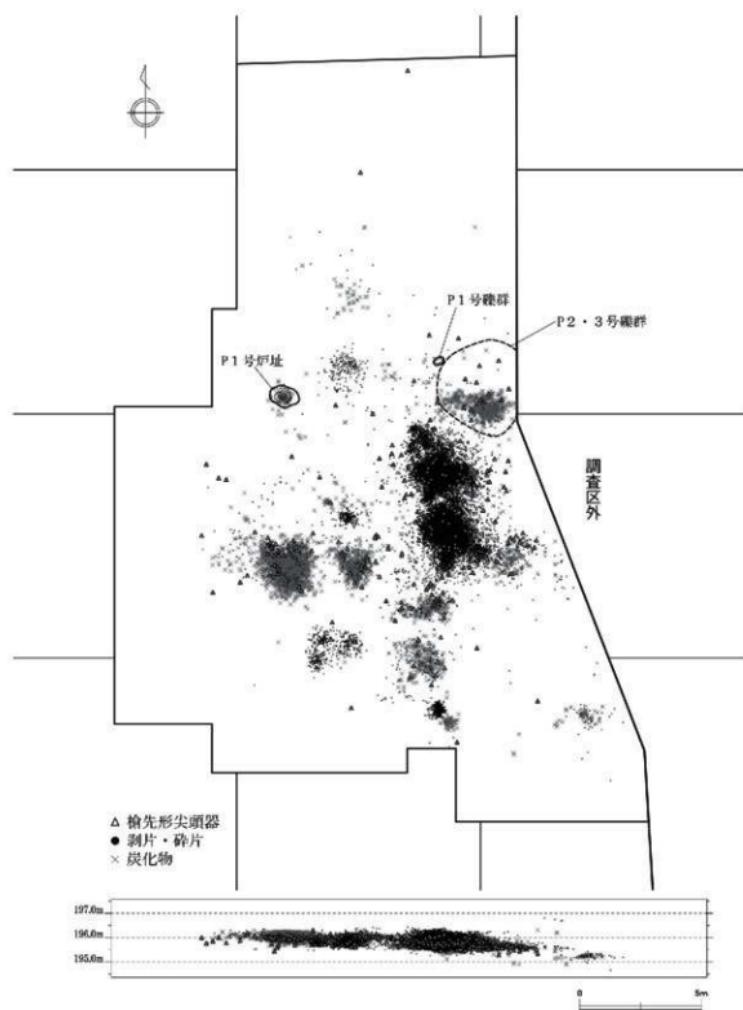
土した。このため調査坑 37 全体を調査対象とし、遺物の広がりを確認することとなった。その結果、調査範囲を 437 m²にまで拡張し、出土した石器は約 18,200 点に及んでいる。平成 28 年度現在も調査は継続中で、調査範囲はさらに拡張しており、今後遺物点数は増加することが推定される。これらの石器の大半は西側中央部にブロックを形成しており、碎片、剥片を中心として、石核、製品が含まれている。製品はナイフ形石器、搔器、角錐状石器が確認されている。石材にはガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩、チャート、黒曜石が見られる。分析はこれからになるが、黒曜石は箱根産のものと見られる。遺物ブロックから南側は傾斜が強くなっているが、北側は比較的平坦であり、礫群を検出した。礫は 3000 点を数え、5 ~ 7 基の礫群を形成している。

4.まとめ

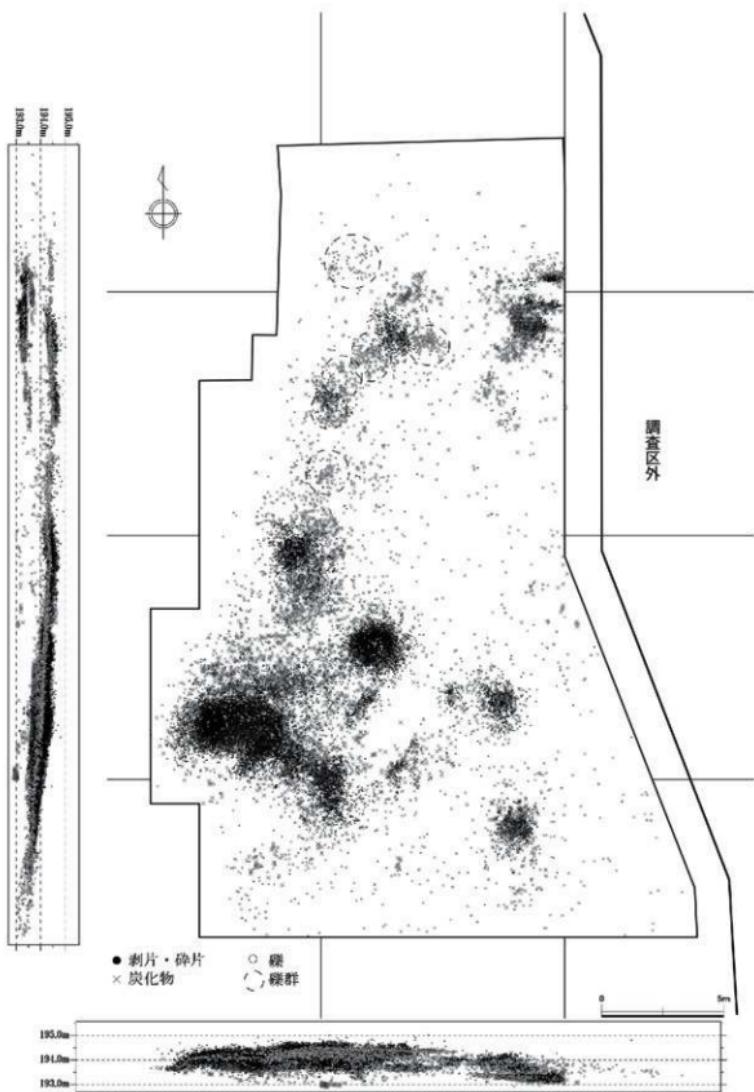
今回の調査では L1H 層下層～B1 層上層と L2 層下層～B2U 層とで遺物群を確認した。L1H 層下層～B1 層上層の遺物群は槍先形尖頭器とその製作に伴う石器群であり、遺物点数は 3 万点に及ぶものとなった。槍先形尖頭器だけでも 250 点を数え、調査期間、面積を考慮すると南関東でも稀有な調査事例と言えよう。L2 層下層～B2U 層でもナイフ形石器や搔器、碎片や剥片が多量に出土した。これらの中には B2L 層上層からの出土と考えられるものも存在し、今後の精査が必要である。また、2 つの遺物群の西側には B0 層、L2 層、B2L 層下層相当層で土石流痕跡が見られ、土砂災害被害などを受けにくい尾根上で石器を作製していたと考えられる。出土遺物量が膨大で、一部は調査中であることもあり、今後の精査が必要である。



第 2 図 養毛小林遺跡 旧石器時代調査坑配置状況



第3図 裳毛小林遺跡III区東 調査坑37 L1H層下層～B1層上層出土遺物分布図 (1/200)



第4図 蓑毛小林遺跡Ⅲ区東 調査坑37 L2層下層～B2層出土遺物分布図(1/200)

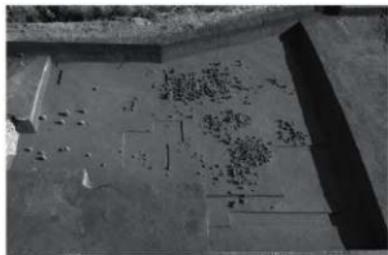


写真1 L1H層下層～B1層上層 遺物出土状況1



写真2 L1H層下層～B1層上層 遺物出土状況2



写真3 L1H層下層～B1層上層 剥片出土状況



写真4 L1H層下層～B1層上層 槍先形尖頭器出土状況1



写真5 L1H層下層～B1層上層 槍先形尖頭器出土状況2



写真6 L1H層下層～B1層上層 槍先形尖頭器出土状況3



写真7 L2層下層～B2U層 遺物出土状況



写真8 L2層下層～B2U層 ナイフ形石器出土状況

小田原市 天神山遺跡第Ⅲ地点

—縄文時代中期～後期の集落と墓域の調査—

とだてつや
戸田哲也

所在 地 小田原市南町一丁目 861 番地 39 他

調査機関 株式会社玉川文化財研究所

調査担当 佐々木竜郎

調査原因 学校法人国際医療福祉大学城内校舎建設工事に伴う事前調査

調査期間 2014年10月14日～2015年3月31日

調査面積 約1,261 m²

第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

1. 遺跡の立地

天神山遺跡は、JR小田原駅から南西約1kmに位置する。遺跡の範囲は小田原市No.26遺跡、同No.62遺跡、同No.101遺跡にまたがり、今回調査した第Ⅲ地点はNo.26遺跡に含まれる。第Ⅲ地点は旧小田原城内高校の敷地内に位置し、地形としては箱根外輪山から派生した丘陵の末端部である天神山丘陵の緩やかな南東側斜面地に該当するが、現状は旧城内高校建設時の造成工事により平坦地となっていた。現地表面の標高は30m前後を測る。

天神山遺跡では、今回の調査も含め過去に4回の調査が行われている。主な遺構として、旧城内高校の擁壁補強部分を調査した第Ⅰ地点で縄文時代中期の石臼炉、天神山丘陵の南側斜面を調査した第Ⅳ地点で縄文時代後期の敷石住居址2軒を含む住居址3軒が検出されている。

本遺跡周辺では、天神山丘陵頂部に位置する天神山台遺跡において、縄文時代中期の住居址が検出されている。また、天神山丘陵の南斜面から低地部に立地する御組長屋遺跡において、後期中葉の竪穴住居址、柄鏡形（敷石）住居址、石垣状積石などが検出されている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、学校法人国際医療福祉大学城内校舎建設工事に伴い、平成21年に神奈川県教育委員会により行われた試掘調査の成果を受けて実施したものである。

平成26年9月16日から調査にかかる準備を開始した。発掘調査は同10月14日に着手し、山留めのH鋼を打設し矢板を設置しながら掘り下げを行った。調査区の北西側では旧耕作土以下の土層が良好に残存していたことから、調査は中・近世の遺構から開始した。遺構の精査と包含層掘削を行って、ローム層上面まで調査を実施し、平成27年3月31日に全ての調査を終了した。

出土遺物は遺物収納箱で約450箱に及んだ。調査面積は約1,261 m²である。

3. 調査の概要

今回の調査では、中・近世から縄文時代にわたる各時代の遺構・遺物が発見された。以下、主体となる縄文時代を中心に概要を述べたい。

(1) 中・近世以降

土坑14基、溝状遺構3条、段切り状遺構1カ所、ピット16基を検出した。土坑・溝状遺構は近世、段切り状遺構は中世に遡る可能性が考えられる。

(2) 奈良・平安時代

竪穴住居址4軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物址5棟、土坑4基、溝状遺構1条、ピット70基を検出し、竪穴住居址2軒はカマドのみであった。概ね奈良時代後半から平安時代の範疇に属する。

(3) 古墳時代

円形周溝状の遺構を3基検出し、円墳の周溝と判断した。1・2号墳が古墳時代後期、3号墳が中期後半もしくは後期初頭頃と考えられる。

(4) 弥生時代

竪穴住居址7軒、土坑2基を検出した。弥生時代後期に属すると考えられる。

(5) 繩文時代

遺構と遺物の時期は中期と後期が主体となり、合わせて土器約260箱、石器約180箱が出土した。

中期は竪穴住居址1軒、土坑墓41基、埋設土器4基、集石址3基、ピット（後期を含め162基）を検出した。

竪穴住居址は周溝やピットが重複していること、また炉址を3基、埋甌を4基伴うことから、拡張あるいは建て替えが行われたと推測される。時期は中期後半の曾利Ⅱ式期と考えられる。

土坑墓は41基を確認した。このうち16基の土坑中から、副葬品と言える完形土器あるいは打ち欠いて整形した小形土器、石匙、石製装身具が出土した。うち1基（J9号土坑墓）からは2点の石匙と共に人骨頭部が出土しており、中期の明確な土坑墓域から副葬品と人骨が同時に出土した調査例として、極めて貴重な例となるものである。また、土坑墓は形態、規模、覆土の特徴が類似しており、これと共に特徴をもつ副葬品のない土坑25基も土坑墓と推定した。これらは調査区の西側にまとめて分布している。時期はいずれ

も中期中葉勝坂式期と考えられる。

埋設土器は土器が正位のもの2基、逆位のもの2基が検出された。時期は曾利Ⅰ～Ⅱ式期である。

後期は竪穴住居址1軒、敷石住居址2軒、配石遺構3基、礫石器集合遺構6基、焼土址81基、埋設土器3基、土坑13基、ピット（中期を含め162基）を検出した。また、遺物量が抜きん出でおり、堀之内1式から加曾利B式にかけての大量の大形土器破片や礫石器のほか、獸骨の加工品を含む焼骨片が約3箱出土した。特に加曾利B2式土器は西湘地域でも質・量ともに特筆され、神奈川県下でも本時期における主要な遺跡の一つとなる。

竪穴住居址は約半分が調査区外となるが、壁柱穴をもち、後期前葉堀之内1式期に比定される。

敷石住居址は敷石の遺存状況が部分的であるため、J1号は抜き取られた可能性があり、J2号は地割れで搅乱されたと考えられる。時期はJ1号が堀之内1式期、J2号が後期前半である。

礫石器集合遺構は、礫石器を中心とした石器群がまとまって検出された遺構をこのように呼んだもので、直線状に並ぶもの、大きく広がりをもつもの、左右対称のものなどバラエティがあった。時期は堀之内式から加曾利B式期である。

埋設土器は、正位のもの、逆位のもの、横位のものが1基ずつ検出され、時期は称名寺式から堀之内1式にかけてのものである。

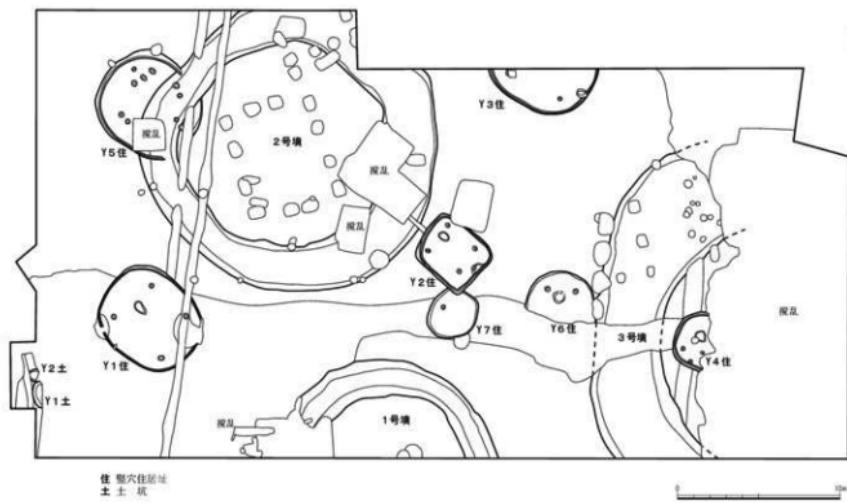
4.まとめ

今回調査した天神山遺跡第III地点は、時代の幅が広く内容が多岐にわたるが、特に繩文時代において、特筆すべき成果が多数あった。

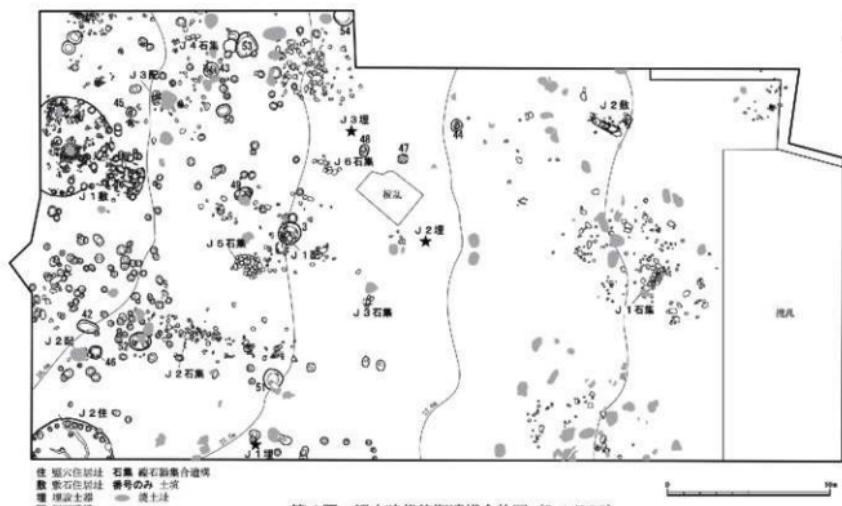
また、丘陵頂部の天神山台遺跡（中期）および南側斜面に位置する天神山遺跡第IV地点、御組長屋遺跡（いずれも後期）との同時性、関連性が認められ、天神山丘陵全体に集落が展開していた可能性が考えられよう。



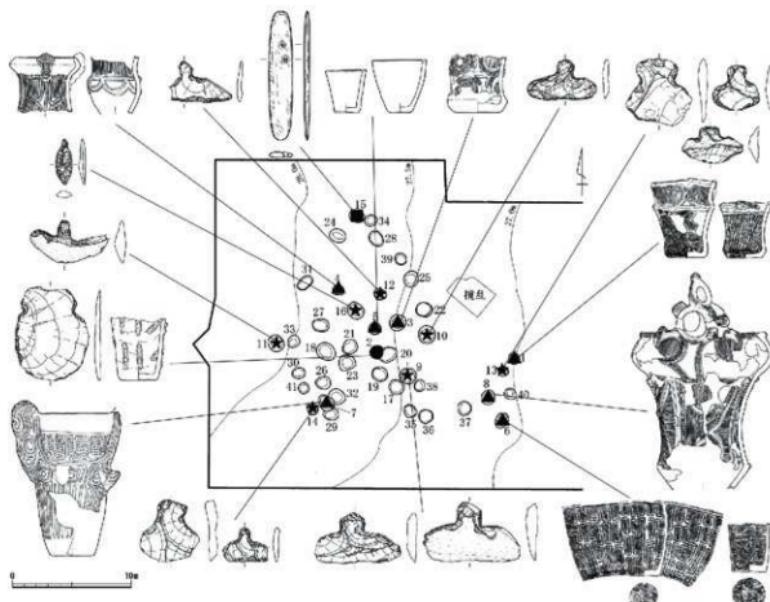
第2図 奈良・平安時代～中・近世遺構全体図 (S=1/300)



第3図 弥生時代～古墳時代遺構全体図 (S=1/300)



第4図 縄文時代後期遺構全体図 (S=1/300)



第5図 縄文時代中期遺物出土土坑墓位置図 (S=1/400)



写真1 調査区全景（背後に相模湾および真鶴半島をのぞむ）



写真2 J5号埋設土器（北から）



写真3 J6号土坑墓（北から）



写真4 J9号土坑墓人骨出土状況（北東から）



写真5 繩文時代土坑墓出土遺物



写真6 J1号敷石住居址遺物出土状況（南東から）

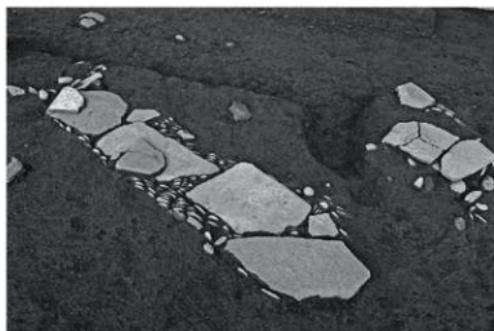


写真7 J2号敷石住居址敷石部分（南から）



写真8 J1号礫石器集合遺構（北から）

相模原市 国指定史跡 川尻石器時代遺跡

—縄文時代後・晩期集落の調査—

なかがわ まさと
中川 真人

所在地 相模原市緑区谷ヶ原二丁目 779 番地

調査機関 相模原市教育委員会

調査担当 中川真人・高野 舞

調査原因 保存目的の確認調査

調査期間 2015年6月1日～7月31日

調査面積 70 m²(調査区 No.39 : 20 m²、No.40 : 50 m²)

1. 遺跡の立地

川尻石器時代遺跡は石野瑛氏らによる昭和初期の調査によって縄文時代の敷石住居址が多数分布することが確認され、採集資料も含めて遺物も豊富なことから昭和16年に国史跡に指定された縄文集落です。指定当時の川尻村から城山町を経て、現在の相模原市緑区谷ヶ原に所在しています。

本遺跡は相模川が関東山地の山間を東流して相模野台地の北縁に至り、流路を南へと変える地形的変換点に位置します（第1図）。北側丘陵部から流れる谷津川がV字谷を形成して相模川へと合流しており、本遺跡は谷津川右岸の河成段丘面に立地します。標高は142～145m前後を測り、谷津川とは比高15～20m、相模川からは70m以上を測ります。本遺跡直下には段丘礫層の露頭があり、硬い基盤の小仏層が不透水層となって谷部には湧泉が発達し、地元で「清水」と呼ばれる水場が今も残されています（第2図）。

遺跡が立地する段丘面は、北側丘陵部の裾から南へと傾斜していきます。史跡指定地内でも北東側が最も高く、調査区No.28とNo.30・31との間には1m程の小段丘崖状の段差が東西に走っています。史跡中央部では、調査区No.30付近



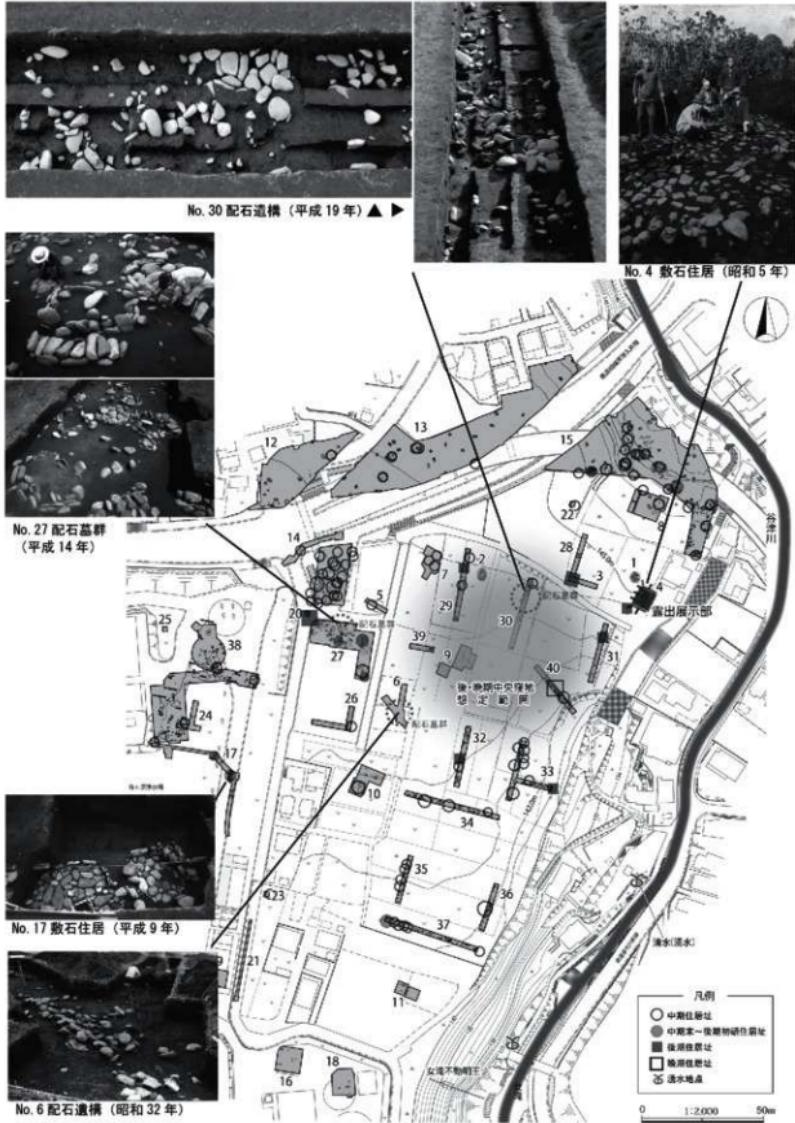
第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

から南東方向に開口するやや窪んだ微地形をなしています。

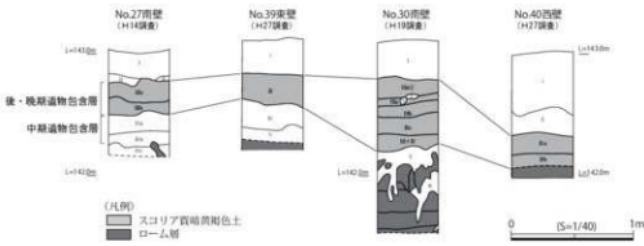
2. 調査に至る経緯と調査経過

川尻石器時代遺跡は約2.3haが史跡に指定されていますが、指定地内の調査は昭和期の部分的な調査しかなく、その実態は不明と言わざるを得ませんでした。そのため、史跡の内容を確認するためのトレンチ調査（調査区No.28～37の10本）を平成18～21年度に実施した結果、縄文時代中期～晩期における遺構・遺物の分布状況が確認され、平成26年度に報告書を刊行しています（中川ほか2015）。

この確認調査で特に注目されたのが、後・晩期の中央窪地の存在です。史跡中央部において後期から晩期にかけて連続とつながる土器型式の遺物包含層の広がりが認められ、包含層には焼骨の碎片が多く含まれていました。その下層にはあるべき中期の遺物包含層及び富士黒土層(IV層)の堆積が



第2図 川尻石器時代遺跡の発掘調査区配置図及び縄文時代遺構分布図



第3図 繩文時代後・晚期遺物包含層の土層対比図

認められずにローム層に達するとともに、調査区No.30を中心とする後・晚期遺物包含層であるスコリア質暗黄褐色土層(Ⅲ層)が厚く堆積する状況が確認されました(第3図)。このことから、大宮台地から下総台地の後・晚期集落に多く見られる中央窪地の形成が考えられたわけです。逆に課題として、後期後葉～晚期の居住施設が未検出であることや、中央窪地の形成要因やその範囲などが挙げられたため、平成27年度に追加の確認調査を実施することとしました。

昭和47年に青山学院大学が発掘調査した調査区No.9では、焼獸骨を多量に伴う後・晚期の遺物包含層が既に確認されていたため(三上ほか1988)、その西縁を探るために西側に調査区No.39を設定しました。また、石野瑛氏は「谷ヶ原石器時代住居跡群」として敷石住居址の発掘調査や採集遺物の資料調査を昭和16年に報告しています(石野1931)、その中で地番毎にボーリング探査で確認された「敷石」の箇所数を報告しています。史跡東側の779番の土地では2か所の「敷石」のほか、「土偶及び異形土器等多数出土」とわざわざ注記されているとともに、採集品(小池家所蔵資料)で掲載された晚期の土製耳飾などは、779番から採集されていたものです。そのため、東側段丘崖への中央窪地の広がりを確認するため、南東方向に窪地状の微地形をなす779番の土地に調査区No.40を設定し、繩文時代後・晚期を対象とした保存目的の確認調査を開始しました。

3. 調査の概要

調査区 No.39

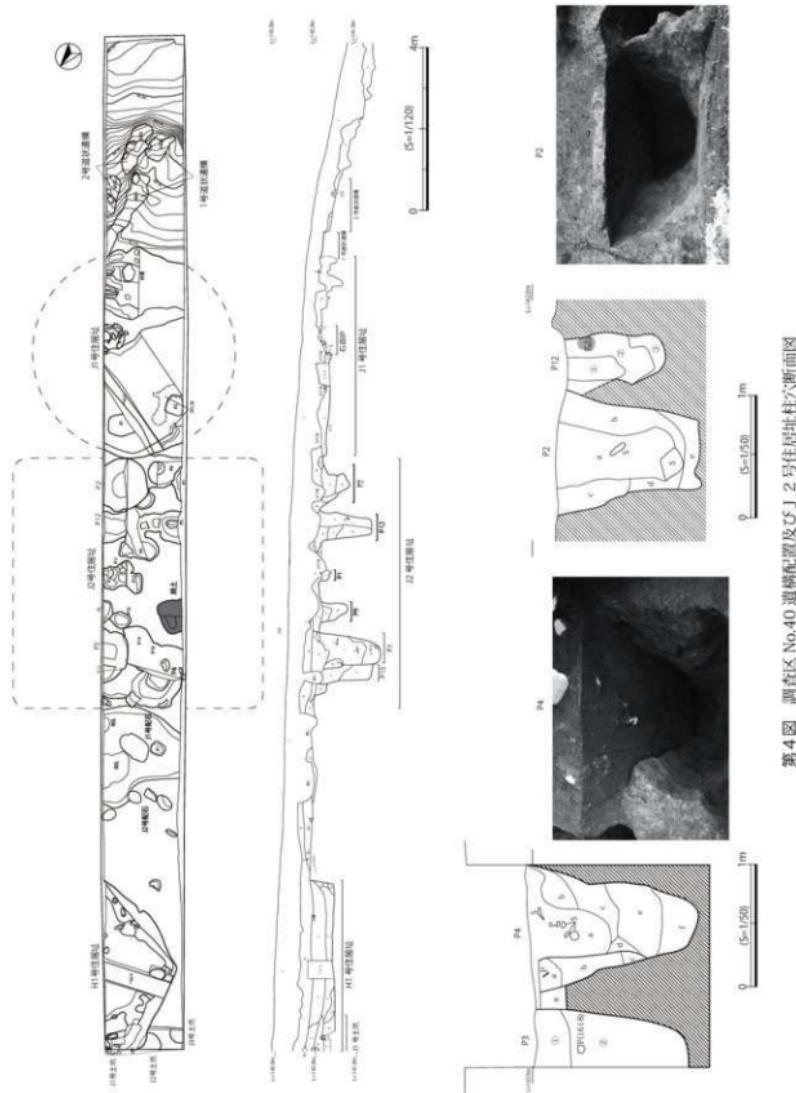
表土層直下にⅢ層以下の自然堆積層が確認され、Ⅲ層の遺物包含層からは後期前葉～中葉を主体としつつも晚期が僅かに含まれております。晚期終末の浮線網状文系土器も出土しました。ただし、焼獸骨は粉末化した1点のみの出土しかなく、土層の堆積や遺物包含層の内容からみても、後・晚期の中央窪地の外側に位置するものとみられます。

IV層上面で遺構の確認ができなかったため、トレントチ東端で一部深掘りを行い、土層の堆積と遺構の分布状況の確認を行いました。その結果、繩文時代の土坑4基、ピット1基が発見されました。土坑はいずれも楕円形を呈し、南北方向に長軸を向いています(写真1)。J1号土坑は捕鉢状の掘り込みで、覆土中から加曾利B2式の粗製深鉢が出土したため、後期中葉の土坑群とみられます。

調査区 No.40

南東方向に設定したトレントチの北西部は、表土層直下に古代相当のⅡ層が確認され、その下にⅢ層が堆積した後、現地表下95cmでローム層に至ります(第3図)。調査区No.30と同様に、Ⅲ層の中には焼獸骨の碎片を包含し、繩文時代中期以前のIV層の堆積が認められないことから、人為的な削平を伴っていたと考えられます。トレントチ南東側では現地表下55cmでローム層の堆積となっており、急激な傾斜によって土層が流失しているとみられます。

調査区No.40からは繩文時代の住居址2軒と、配



第4回 調査区No.40 遺跡配置及びJ.2号柱跡柱穴断面図

石遺構2基、土坑3基のほか、平安時代の竪穴住居址1軒、近世以降の土坑1基、時期不明の道状遺構2条が確認されました（第4図）。注目すべき遺構としては、長径85cm×短径55cm×厚さ約50cmの巨礫を伴う配石遺構（写真3）とそれに隣接して分布する晩期のJ2号住居址（写真4・5）の発見です。

J2号住居址は、配石遺構とJ1号住居址（中期後葉）の間で検出されました。住居址の全容はよくわかりませんが、調査区内で確認した大きさは約6mとやや大型の住居です。調査区南壁沿いには地床炉とみられる焼土が確認され、住居範囲の西側に寄ります。住居址を最も特徴づけるのは大型の柱穴を伴い、これらが多数検出されて重複している点です。この場所で何度も建て替えを繰り返していたことが窺えます。2号柱穴（P2）は、径1.26m×深さ1.66mの大形の土坑のような柱穴で、土層の堆積状況は真ん中に柱痕がみられ、周りはロームブロック混じりの土で埋められていました（第4図）。4号柱穴（P4）は径0.95m×深さ1.77mを測り、2号柱穴と同様の大形の土坑状の柱穴です。

住居内の覆土にはロームブロックを混入し、焼獸骨の碎片を多量に伴います。ドットで点上げしたものだけでも220点を数えます。多くは1cmにも満たない碎片ですが、鑑定したところ、イノシシやシカとみられるものが含まれていました。出土遺物は晩期中葉の安行3c式～3d式を主体としており、住居址もその時期に帰属すると考えられます。特殊な遺物としては、晩期に特徴的な滑車形を含んだ土製耳飾や石刀、石冠が出土しています。

4.まとめ

人為的な削平行為によって中央窪地が形成された後・晩期集落である横浜市華蔵台遺跡や千葉県流山市三輪野山貝塚では、窪地内に焼獸骨の分布が確認されています。川尻石器時代遺跡において

時期	年代 (caBP)	川尻縄文集落
中期	前葉 5,470～5,380年前	環状集落
	中葉 5,380～4,900年前	敷石住居
	後葉 4,900～4,520年前	配石集落
	末葉 4,520～4,420年前	中央窪地型集落
後期	初葉 4,420～4,250年前	
	前葉 4,240～3,820年前	
	中葉 3,820～3,470年前	
晩期	後葉 3,470～3,220年前	
	前葉 3,220～2,950年前	
	中葉 2,950～2,730年前	
	終末 2,730～2,350年前	

※年代は小林謙一 2008「縄文時代の晩年代」参照

第5図 川尻石器時代遺跡の縄文集落変遷

も、土層の削平が認められずに標準的な堆積状況であった西側の調査区No.39では、焼獸骨も分布しませんでした。一方、東側の調査区No.40では焼獸骨を含有する後・晩期遺物包含層直下でローム層に至る状況から、人為的な削平を伴う窪地の形成が想定されます。今回の調査によって、中央窪地の広がりを確認することができ、その大きさは径60m程とみられます。

また、今回の調査で大きな成果として挙げられるのは、後・晩期の中央窪地の南東縁において、配石遺構とともに晩期中葉の住居址が検出されたことです。晩期の住居址の発見は一時的な断絶はあったにせよ、中期から始まる長期的な拠点的集落の変遷において、後・晩期における中央窪地型集落として新たに位置づけることができます（第5図）。学術的にも重要な縄文集落であることを再認識させられるとともに、昭和初期の調査によって史跡として面的な保護がされた意義を、きちんと評価していかなければなりません。

【参考文献】

石野 琢 1931「相模國谷ヶ原石器時代住居跡群」

『史跡名勝天然紀念物』6

中川真人ほか 2015『国指定史跡川尻石器時代遺跡Ⅱ』

相模原市教育委員会

三上次男ほか 1988「史跡「川尻石器時代遺跡」の調査報告」

『青山考古』6



写真1 調査区 No.39 土坑群 (後期中葉)



写真2 調査区 No.40 トレンチ全景



写真3 調査区 No.40 J 1・2号配石遺構 (晩期)



写真4 調査区 No.40 J 2号住居址 (晩期中葉)



写真5 調査区 No.40 J 2号住居址柱穴群 (晩期中葉)

平塚市 竹之内遺跡第5地点・北金目塚越遺跡第18地点
—初の勾玉出土—

やまうち あつし いちかわ やすひろ
山内 淳司・市川 康弘

所在地 平塚市北金目三丁目 11番地
平塚市真田二丁目 1番地 2・9
調査機関 大成エンジニアリング株式会社
調査担当 山内淳司・小宮山友康
調査原因 宅地造成
調査期間 2015年8月19日～9月25日
調査面積 竹之内：264 m²、塚越：173 m²

1. 遺跡の立地

本跡が立地する北金目台地は、市北西部を流れる金目川と大根川に挟まれた半島状の台地で、西から東にかけて緩やかに傾斜する。台地の標高は20.0～50.0 m程度、沖積低地との比高差は3.0m～10.0 mを測る。台地の北～東縁辺部には多く支谷が形成され、台地を樹枝状に開析している。このような谷地形により、台地上の平坦部は細いやせ尾根状を呈する。で周辺は田畠や河川などの自然環境に富み、湧水が絶えない状況である。

両遺跡が立地する台地上には複数の遺跡が纏まっており、寺尾遺跡（No48）、真田城跡（No50）、北金目塚越遺跡（No237）、塚越古墳（No8）、大久保遺跡（No233）、竹之内遺跡（No235）、北金目古墳（No44）、王子ノ台遺跡（No236）、入谷戸遺跡（No238）の9遺跡を併せて、真田・北金目遺跡群として呼称されている。同遺跡群は平成7年から土地区画整理事業に伴って、継続的に大規模な発掘調査が実施されており、旧石器時代から近世に至るまで連続と続く遺跡群本跡周辺の遺跡分布は極めて濃密で、平成7年9月1日から開始された「平塚市都市計画事業真田・



第1図 遺跡位置図

北金目特定土地区画整理事業」による大規模調査によって多くの知見が得られている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、宅地造成工事に伴い、竹之内遺跡と北金目塚越遺跡が事業計画地内に含まれており、竹之内遺跡は試掘調査が2015年6月19日に平塚市教育委員会によって実施され、その結果を受け、北金目塚越遺跡は隣接地の調査成果を受けて、本調査を実施したものである。

調査は竹之内遺跡が2015年8月19日から、北金目塚越遺跡が8月25日から開始した。調査の結果、竹之内遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、小穴、中・近世の溝状遺構、道路状遺構、土坑が確認された。調査面積は264 m²である。北金目塚越遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑、

小穴、中・近世の小穴が確認された。調査面積は173 m²である。

主な出土遺物は、両遺跡共に弥生時代から古墳時代の土器（壺、甕、高杯、鉢）が大半を占めており、これまで確認されている成果に加えて、今回は勾玉の出土が際立つ。

3. 調査の概要

竹之内遺跡第5地点

(1) 弥生時代後期～古墳時代前期

主体を占めるのは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡（平面：橢円形ないし隅丸方形）であり、総数11軒が部分的に切り合いながら分布し、それらをさらに掘り込むように古墳時代前期の竪穴住居跡2軒（平面：方形）が東西に切り合いを持たず、概ね同規模で構築されている状況が確認された。その内1軒からは竹之内遺跡内では初となる勾玉が底面付近から出土した。出土遺物から古墳時代前期の住居跡（SI10）と考えられる。また、住居跡を掘り込む掘立柱建物跡1棟（SB01）は、北側柱列に所謂、溝もちの状況を呈していた。この他に住居跡に切られる土坑が2基、小穴が34本確認されています。

(2) 中・近世

中世と考えられる溝状遺構1条、近世以降と考えられる道路状遺構1条と土坑1基である。溝状遺構（SD02）は本調査区周囲に広がりが確認される赤褐色の硬質の土層（以後、硬化層）を切り、その以北からは硬化層が検出されなかった。硬化層の形成時期や過程を考える上でSD02との切り合いとその位置関係は非常に興味深い。

北金目塚越遺跡第18地点

主体を占めるのは弥生時代後期～古墳時代前期の遺構で、該期の遺構として、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構5基、土坑4基、小穴15本が確認されました。東西幅約6.3m、南北長約27.5mの細長い調査区内に、竪穴住居

跡及び竪穴状遺構が水平方向並びに垂直方向に著しく重複しており、個々の竪穴住居跡の残存状況は決して良好でなかったが、SI14は長軸約9.3m、短軸約8.5mと、本遺跡群で確認された弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡の中で最大級の規模を誇り、床面付近から市内では初の出土例となる翡翠製勾玉2点、碧玉製管玉2点が出土した。またSI13の床面上からはほぼ完形に復元される土器6個体が意図的に遺棄されたかのような状態で出土した。

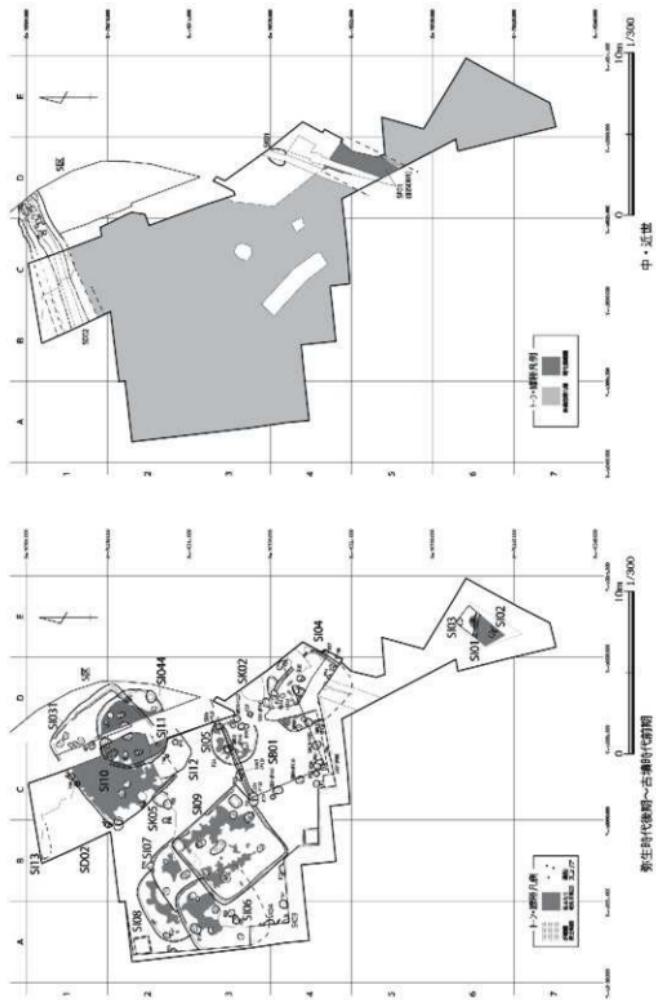
4.まとめ

竹之内遺跡第5地点

SI10より出土した勾玉は、蛇紋岩製で底面付近から出土した。表面は良く研磨され、整形も比較的丁寧である。製作年代は形状と技法の特徴から古墳時代前期後半から中期前半と推定され、出土土器とほぼ齟齬はない。周囲の住居跡は既調査地点で確認されている住居跡の中では僅かながら規模は大きく、本住居跡の位置付けが今後の課題となろう。

北金目塚越遺跡第18地点

SI14から出土した勾玉・管玉は計4点とやや多い。特に勾玉は翡翠製で、時期は前後するが本遺跡群が立地する金目川水系の首長墓と位置付けられる塚越古墳の副葬品からも認められておらず、当時としても貴重と考えられる。本集落の居住者集団と方形周溝墓の被葬者集団の関係性を物語る上で貴重な資料と言える。また、SI14出土の勾玉・管玉の製作年代は形状と技法の特徴から弥生時代中期後半と推定され、出土土器に比してやや古く、これらの玉類は、本調査区の北東方向に展開していた弥生時代中期の集落から移り住む際に伝世した品である可能性も考えられる。



第2図 竹之内遺跡 各時代遺構全体図 (S=1/300)



写真1 竹之内遺跡 調査区全景



写真2 竹之内遺跡 壁穴住居跡 (SI10)



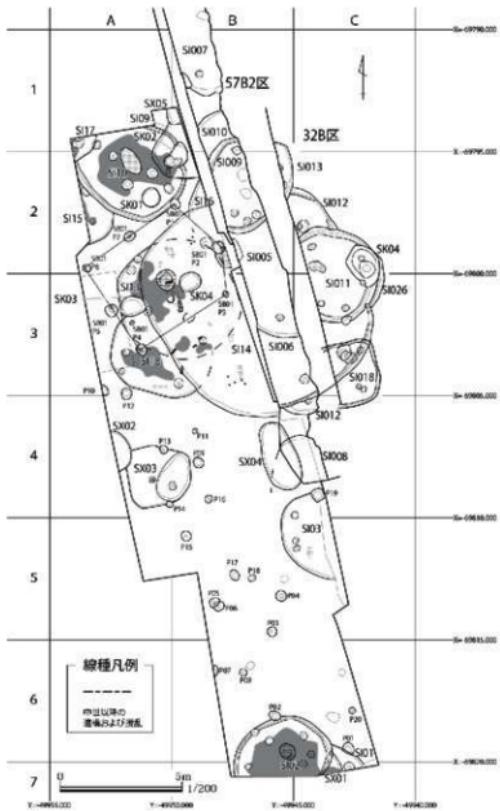
写真3 竹之内遺跡 SI10 勾玉出土状況



写真4 竹之内遺跡 主な出土土器



写真5 竹之内遺跡 硬化屑北部 SD02 検出状況



第3図 北金目塚越遺跡 遺構全体図 (S=1/200)



写真6 北金目塚越遺跡 調査区全景



写真7 北金目塚越遺跡 穫穴住居跡 (SI14)



写真8 北金目塚越遺跡 SI14 出土勾玉・管玉



写真9 北金目塚越遺跡 穫穴住居跡 (SI13) 遺物出土状況



写真10 北金目塚越遺跡 SI13 出土遺物

横浜市 下飯田林遺跡第2地点
—弥生時代後期後半の集落跡—

にし の よしのり
西野 吉論

所在地	横浜市泉区下飯田町 859 番 7 外 23 筆
調査機関	株式会社玉川文化財研究所
調査担当	小林晴生
調査原因	泉ゆめが丘地区土地区画整理事業埋蔵文化財本体調査業務
調査期間	2016年1月4日～2016年3月25日
調査面積	地区西 321.03 m ² 地区南 2065.60 m ² 合 計 2386.63 m ²



第1図 遺跡位置図 (1/10,000)

1. 遺跡の立地

調査地点は2地点に分かれており、地区西が相鉄線ゆめが丘駅の北西約150m、地区南が横浜市営地下鉄下飯田駅の南西約50mに位置している。地勢的には、横浜市域南西端の多摩丘陵から西側に連なる中位段丘面に立地し、西に境川、東にはその支流である和泉川がそれぞれ南流する。遺跡の標高は約36mを測り、沖積地との比高差は約15～20mを測る。

本遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地、横浜市泉区No.65遺跡（神奈川県No.40遺跡）の範囲に含まれている。同遺跡内での本格調査には、今回調査した地区南に隣接する横浜市営地下鉄敷設に伴って行われた下飯田林遺跡（第1地点）がある。弥生時代後期後半の竪穴住居址21軒、土坑1基、ピット群、古代～中世の円形土坑1基が発見されており、地区南で調査された弥生時代の住居群と同一集落と考えられる。そのほか周辺の遺跡は、境川左岸に中ノ宮遺跡、草木遺跡、泉警察署遺跡が知られている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、泉ゆめが丘地区土地区画整理事業に伴う本格調査である。

地区西

地区西の調査は平成28年1月4日から開始した。Ⅲa層上面で古代の溝状遺構1条（1号溝）、中世～近世の溝状遺構1条（2号溝）、中世～近世のピット88基を検出し、中テンバコ1箱分の遺物が出土した。また、1号溝状遺構を完掘したところ、縄文時代の陥し穴を1基検出した。なお、2号溝状遺構は事業区域内で試掘したところ、北側に延長することが確認できた。

地区南

地区南の調査は、平成28年1月9日から開始した。Ⅲa層上面で弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居址23軒、土坑3基、ピット7基、近世以降の溝状遺構2条を検出し、中テンバコ11箱分の遺物が出土した。

なお、整理作業および報告書作成業務は次年度

以降の現地調査業務がすべて完了した後に一括して行われる予定である。

3. 調査の概要

地区西

調査区は、西側を南流する境川に向かう緩斜面に近い台地縁辺部に立地する。地区西では、縄文時代の陥し穴1基、古代の溝状遺構1条と中世～近世にかけての溝状遺構1条、および中世以降のピット群を検出した。

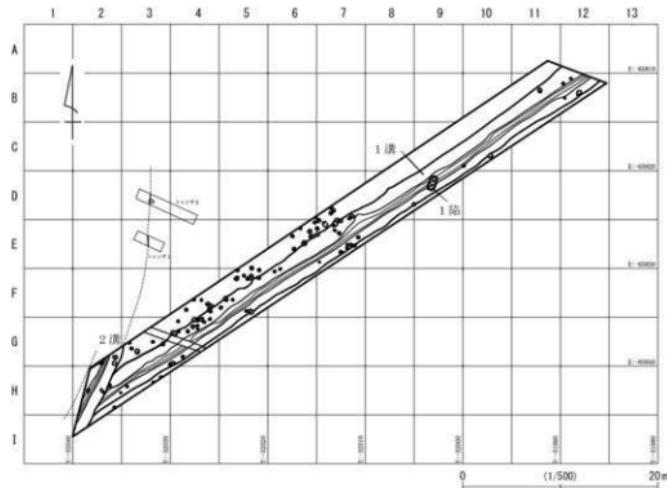
1号陥し穴はD-9グリッドに位置している。底部に2基の小ピットをもつ。

1号溝状遺構は調査区中央に位置し、北東～南西方向に延び、両方向とも調査区外に続く。北西側壁が南西壁側に比べやや緩やかに立ち上がる。断面形は薬研状を呈するが、底面の幅はやや広く、部分的に段差をもち、掘り直しが行われていると考えられる。覆土上層から土師器壺、底面付近か



写真1 地区西1号溝状遺構全景（北東から）

ら須恵器壺が出土した。2号溝状遺構は調査区南西端で検出した。北北東～南南西方向に延び、調査区外に続く。調査区外での試掘調査の結果、北



第2図 下飯田林遺跡第2地点 地区西遺構配置図 (1/500)

方向に向きを変えながら続くことが確認できた。断面形は薬研状を呈している。2号溝状遺構は遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、1号溝状遺構を切ることや覆土の観察から中世～近世にかけての所産と考えられる。

ピットは88基あり大きく3群に分けることができるが、いずれも建物になるような配置はみられない。覆土の観察から、中世・近世以降に属するものと考えられる。

地区南

調査区は境川左岸の台地縁辺部に立地する。東側は小支谷に向かう斜面となり、西側は境川との間に南北に延びる台地平坦部となる。地区南では、弥生時代後期後半を主体とする竪穴住居址23軒、土坑3基、ピット7基、近世以降の溝状遺構2条を検出した。

各遺構の概略について、まず住居址の様相を述べていく。平面形をみてみると、胴張隅丸方形が5軒、隅丸方形が16軒、方形が3軒である。主軸長は、胴張隅丸方形の住居址は21号住を除き4m台で、隅丸方形の住居址は3.5m～5.4mとバリエーションに富む。方形の住居址は3.4m～4.4mでやや小さいものが多い。

検出面から床面までの深さは、1号住が20cm程と浅いそのほかは相対的に深く、40～50cmの範囲に6軒、50～65cmの範囲に10軒、70～80cmの範囲に7軒である。主軸長が5mを超える6・7・21号住は60cm以上の深さで、4m前半までの住居は60cm未満が多い。

床面は貼り床をもつものがほとんどで、掘り方がローム層まで達している住居址では、黒褐

色土とローム土を混ぜて作られている。主柱穴を床面で4本確認できたのは4軒、掘り方で確認できたのは1軒である。

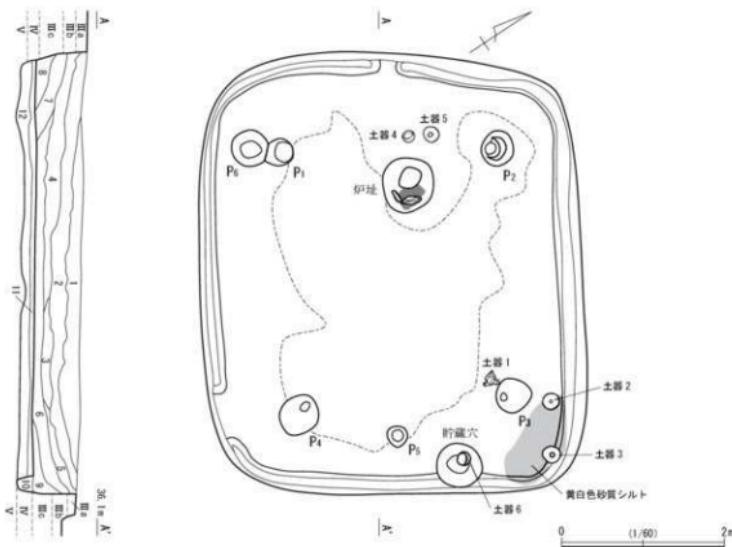
炉址は2号住と調査区内で確認できなかった住居を除き、全て地床炉で奥壁側に偏在する。火床面に用いられている石英などの鉱物を含有する黄白色砂質シルトと同様の土が、6・7・10・14・15・19・21号住の北東側コーナー付近の床面上に堆積しており、住居内に保管していたと考えられる。

貯蔵穴は6・7・9・14・16・17b・18・19・21号住にあり、出入口ピットに隣接して位置している。6・14号住以外の7軒には、貯蔵穴の周囲にローム土を固めて作られた弧状の周堤を持つ。21号住は貯蔵穴を3基もち、その一つは床面とほぼ同一レベルの北東壁に横穴を穿ち作られている。

出入口部は1・12・14・18号住と20号住の新段階を除くと全て南東方向である。12・14・18・20号住は出入口部が北東方向にある。そのほか、8・10号住は横長タイプの住居で、15・16・17a・21号住は焼失家屋である。また、



写真2 下飯田林遺跡第2地点地区南（上空から、上が南東）



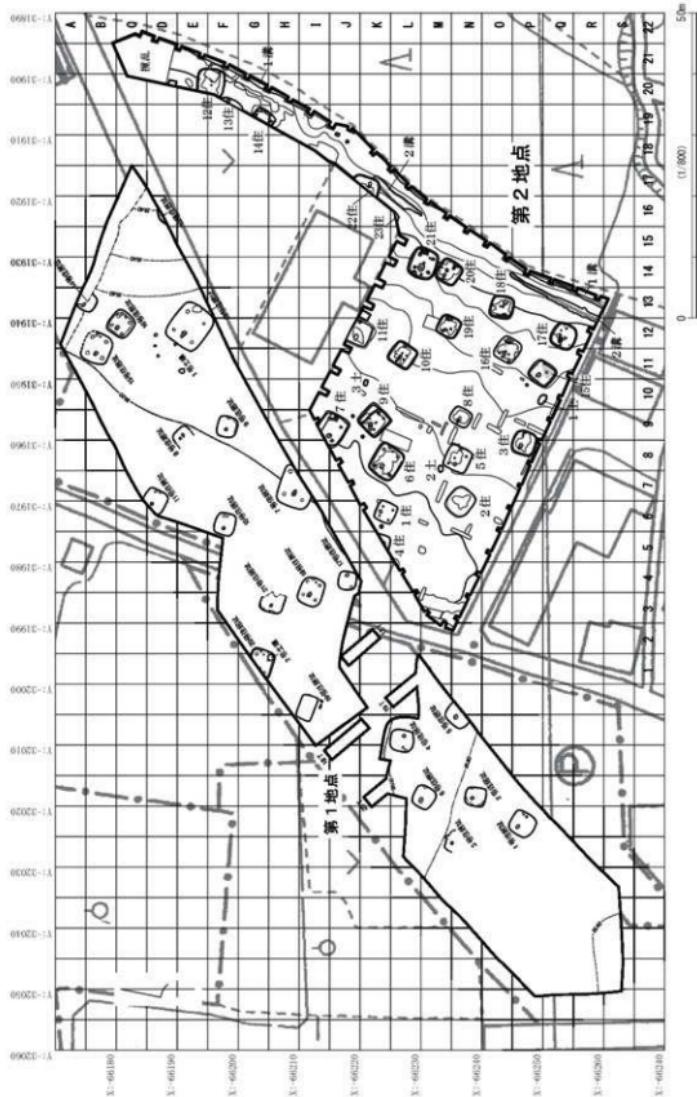
第3図 下飯田林遺跡第2地点 地区南6号住居址



写真3 地区南6号住居址灶址・遺物出土状況
(南西から)



写真4 地区南6号住居址遺物出土状況および
黄白色砂質シルト堆積状況 (南西から)



第4図 下飯田林道跡第2地点 地区南遺構配置図および第1地点合わせ図

17号住居址は同一の規模・平面形態で、検出面から57cmと78cmの深さに床面が作られていた。拡張や縮小を行わず、床の高さのみを上げて建て替えを行っている。

遺物は、東京湾岸系の1段輪積み甕、ナデ甕、相模湾系のハケ甕、東海地方西部系のハケ甕、欠山式の高环、元屋敷式の高环などが出土した。

土坑は3基検出した。遺物は出土しなかったため、詳細な時期や用途は不明であるが、覆土から住居址と同時期と考えられる。ピットは7基検出した。ピット4~6は掘立柱建物と想定される。

溝状遺構は調査区の東壁に沿って2条検出された。1号溝状遺構は調査区東壁に沿って部分的に調査することができた。調査範囲での規模は、未調査部分も含めると約82mで、南北方向にさらに延びる。断面形は葉研状を呈する。遺物は出土していないが、宝永火山灰を含むI b層を切り込んで作られていることから、近世後半以降の所産であろう。2号溝状遺構は1号溝状遺構に併行しており、北北東~南南西方向に延びている。断面形は南側がV字状を呈する。遺物は出土していないが、覆土から、中世後半~近世前半に属すると考えられる。

4.まとめ

地区西

地区西で検出した溝状遺構はいずれも調査区外に伸びている。そのうち、1号溝状遺構の延伸部分については平成28年度に調査を行い、さらに南西に伸びていくことが判明した。この調査では、他にも中世の墓地を検出した。

2号溝状遺構は、遺物が出土していないが、重複関係と覆土から中世以降と考えられる。

地区南

地区南では、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の集落を検出した。本調査区の北西側には同時期の住居址群が検出された下飯田林遺跡第1

地点が隣接しており、同一集落を形成していたと考えられる。ここでは、そこで検出された住居址の様相と比較・検討しながらまとめてみる。

まず、住居址の特徴についてみると、第1地点では小型で浅い住居址と、比較的大型で深い掘り込みをもつ住居址に二分されている。今回の住居址群では、主軸長が5m以上は3軒、4~5mは8軒、4m未満は10軒であった。しかし、明確に分類することはできず様々な規模が存在し、3~4m代の住居址が主体的であることが確認できた。また、主軸方位はN~40°~80°~Wを指し、ほぼすべての住居址の出入口が南東側にある。

次に、住居址の分布状況をみると、重複がなく整然とした住居址配置を示していた。近接する例があることから、すべてが同時期に存在していたとは考えにくいが、第1地点と本調査の合計5,035m²の範囲に、44軒の住居址が重複なく存在していたことは、集落の形態を見る中で一つの典型例を示すものであり、住居の营造に際し一定の間隔をもって企画的に配置されていたこと、そしておそらく同一集団が營続した集落であったことなどが推測されるのである。

集落の營続期間について詳細な時期は今後の本格的な整理を待たねばならないが、第1地点調査では住居址群の分布状況から比較的短期間の集落であった可能性が指摘されている。今回の調査では、住居址同士が近接する例や、床面を嵩上げして建て替える例などがあるが、重複は見られず、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半のある限られた時間幅に収まるものと思われる。

集落の規模についてみると、まず第1地点の調査で西限が捉えられており、東側には谷が入り込んでいることから、本調査において集落の東限を検出しえた可能性が高い。その結果、集落の範囲は、東西約130m、南北90m以上の1万平米を超える面積をもっていたと推定できる。

鎌倉市 宝積寺跡・天神山下城遺跡

— 山頂から一括廃棄状況を示す瓦塔の出土 —

かなもり ひろあき
金森 弘晃

所在 地 鎌倉市山崎字富士塚 794 番外

調査機関 武相文化財研究所

調査担当 金森弘晃・境 雅仁

調査原因 特別養護老人ホームの建設

調査期間 2014年9月16日～10月10日

2015年4月6日～11月11日

調査面積 5,038 m²



第1図 調査位置図 (1/25,000)

1. 遺跡の立地

宝積寺跡・天神山下城遺跡（鎌倉市No.240・358遺跡）は、北北東約1.8kmにJR大船駅、南南西約0.25kmに湘南モノレールの湘南町屋駅が位置する。鎌倉市北西部にある天神山（標高63m）の南350mの丘陵頂上部のわずかな平坦面上（標高46m）から南東斜面上に遺跡が存在する。本遺跡から天神山に続く南北方向稜線の両側は柏尾川低地に向かう急傾斜地になっている。遺跡のある丘陵上の平坦面には立川ローム層と黒色土層が堆積しており、主に東側斜面の地滑り群によって変位している。

2. 調査に至る経緯と調査成果

当該地に特別養護老人ホーム建設に伴う開発事業計画の話が鎌倉市教育委員会文化財課に寄せられ、事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地（鎌倉市No.240・358）に該当することから、事前の試掘調査が必要と判断された。試掘調査は新設道路部分及び老人ホーム建設予定地・その他にも合計5ヶ所のトレンチを設定し、市教委によって平成26年6月31日に行われた。その結果、弥

生時代後期から古墳時代前期及び、中世遺構・遺物が検出された。後日試掘範囲を広げ、再度試掘調査が平成26年7月1日に行われ、その結果前回と同時期の遺構・遺物が検出された。本調査は試掘調査の結果を受けて5038 m²の調査区域を設定した。

発掘調査は平成26年9月16日から10月10日まで実施され、一旦中断した後、平成27年4月6日から11月11日まで実施された。想定以上の遺構の検出と、地形的な悪条件により、当初の計画から調査期間を2ヶ月延長して調査を行った。発掘調査は大きく3ブロックに分け、新設道路部分から調査を行い、次に頂上部へと移行し、最後に斜面地の調査を行った。調査区内で発生した残土は場内で処理する事となり、多量の残土移動が調査活動の妨げとなつた。

3. 調査概要

調査の結果、弥生時代・古墳時代・古代の竪穴建物址 77軒、土坑 16基、土壙墓 20基、掘立柱建物址 5軒、烟状遺構 1基、井戸 3基、段切り遺構 6面、横穴状遺構 9基、土壙状遺構 1基、柵列 1基、溝状遺構 19条などを検出した。

(1) 弥生時代～古墳時代

弥生時代～古墳時代にかけての竪穴建物址 70軒が検出された。

頂上部の平坦面から斜面地の段切り面 6面のすべての面から竪穴建物址が確認された。竪穴建物の大半は重複し、山側の壁を残し、谷側の壁面が後世に行われた段切り事業によって削平されていることが判明した。

中段面で検出された第 15 号竪穴建物址床面上からは硬質緑色凝灰岩の原石・剥片・チップ・砥石が出土した。未製品の出土はないが、玉作り公房址を想定される遺物の出土状況である。

(2) 古代

古代に相当する竪穴建物址は頂上から最下段面まで点在し、特徴的な遺構・遺物として瓦塔片の出土と、粘土貼付掘立柱遺構がある。瓦塔は頂上北西崖沿いで 38 点が出土した。瓦塔片は全て細片で、基壇部・屋蓋部・隅棟部・軸部の部位が出土している。屋蓋部の傾斜角の違いから多層塔と推定される。

(3) 中・近世

中段北端の平坦面から五輪塔の各部位が総数 35 点出土した。元位置を留める物もあるが、広範囲に点在し、土壙の中からも出土している。20 基検出された土壙墓は、人骨も検出され、火葬の痕跡も 3ヶ所で確認された。

近世では、烟状の歛跡が 1 面確認され、宝永火山灰が多量に混入した人為的に搅拌されて、宝永スコリアの軽石が混ざった耕作土の堆積も確認された。耕作土中からはメノウ製の火打石も出土

している。

4. まとめ

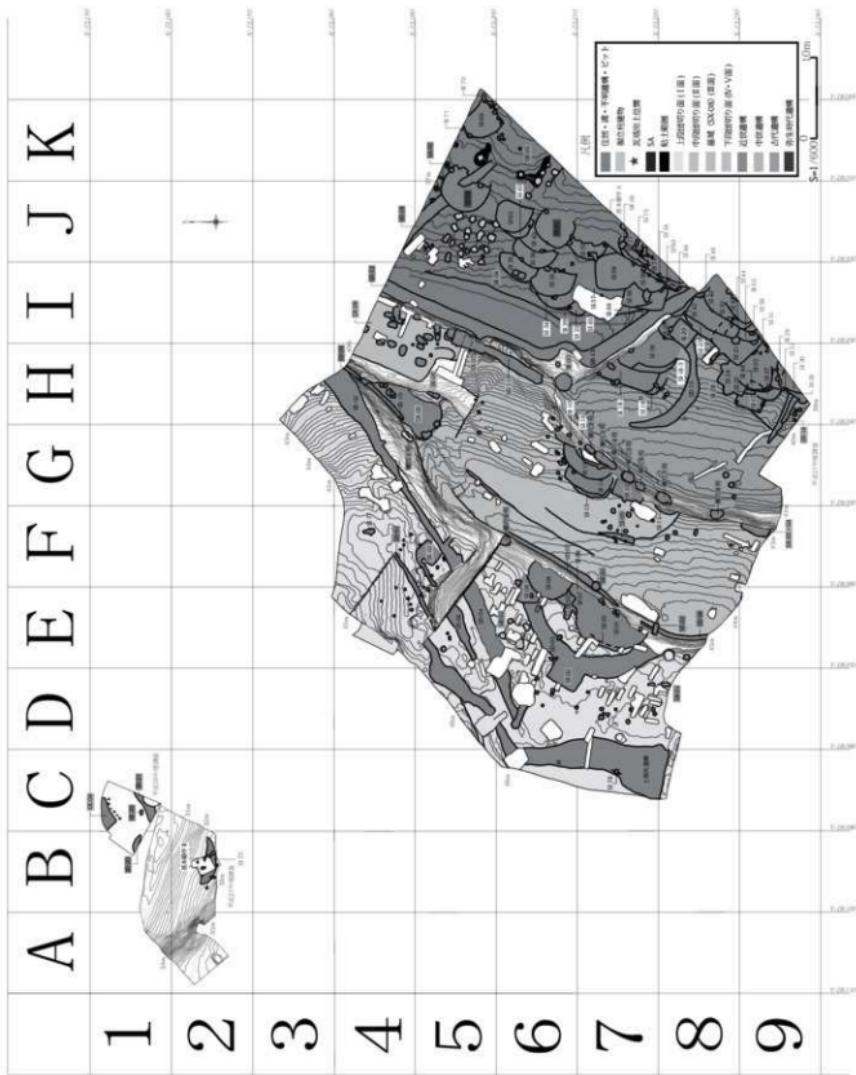
調査区最下段では 40m × 30m の範囲内に弥生時代～古墳時代の竪穴建物址が 27 軒重複して検出された。中世末～江戸時代初頭にかけて行われた段切り造成地業によって、多数の竪穴建物址が消滅したと考えられる。また縄文時代以前と江戸時代に大きな地震の痕跡も確認された。古墳時代の竪穴建物址床面には地割れの痕跡が残り、割れ口から五輪塔とかわらけが出土している。興味深い事例である。



写真1 瓦塔



写真2 五輪塔



第2図 遺跡全体図 (S = 1/600)



写真4 宝積寺跡・天神山下城遺跡 下段完掘状況（北東）



写真5 瓦塔片検出 作業風景（南東）



写真6 五輪塔 出土状況（東）

川崎市 橘樹郡衙跡〔千年伊勢山台遺跡〕第16～20次調査
—平成27年度橘樹官衙遺跡群確認調査事業の成果—

くりた かづお
栗田一生

所在地 川崎市高津区千年字蟻山・伊勢山台・
上原宿

調査機関 川崎市教育委員会

調査担当 栗田一生・館 祐樹

調査原因 試掘調査・内容確認調査

調査期間 [第16次] 2015年6月17日～7月14日

[第17次] 2015年8月31日～9月18日

[第18次] 2016年1月14・15日、
2月15～17日

[第19次] 2016年2月15・16日

[第20次] 2016年3月10日～23日

調査面積 [第16次] 約79.4m²

[第17次] 約226.4m²

[第18次] 約140m²

[第19次] 約19.4m²

[第20次] 約39.6m²



第1図 橘樹郡衙跡〔千年伊勢山台遺跡〕位置図

(S = 1/25,000)

西側に隣接する古代寺院跡の影向寺遺跡とともに、その一部が橘樹官衙遺跡群として国史跡に指定されました。

2. 調査に至る経緯と調査経過

橘樹郡衙跡は、郡衙の主要施設である正倉院は確認されているものの、郡庁等、ほかの主要施設が未だ確定していないことから、川崎市教育委員会は平成25年度から橘樹官衙遺跡群確認調査事業として確認調査を実施しています。平成27年度は、①正倉院北側における郡衙関連構造の広がりの把握、②平成25年度に橘樹郡衙跡上原宿地区で検出した南北建物の詳細把握、を目的に2回の調査(第16・17次調査)を予定していましたが、想定外の開発計画に伴う調査(第18・19次調査)と第16次調査の追加調査(第20次調査)が加わり合計5ヶ所の調査となりました(第2図)。

1. 遺跡の立地

橘樹郡衙跡〔千年伊勢山台遺跡〕(以下、「橘樹郡衙跡」という。)は、神奈川県東部に位置する川崎市のほぼ中央、川崎市高津区千年に所在し、多摩川右岸から約2.6kmの距離を隔てた多摩丘陵の頂部、通称「伊勢山台」と呼称される平坦面に立地しています。「伊勢山台」は標高40～42mの平坦面で、東西に広がり、北側及び東側に広がる沖積低地とは約30mの比高差があります。

遺跡は、縄文時代から中世までの複合遺跡ですが、古代武藏国21郡の1つである橘樹郡の役所跡が発見されたことから、橘樹郡衙跡と呼ばれています。橘樹郡衙跡は、平成27年3月10日、



第2図 橋樹郡衙跡調査地点 (S = 1/3,000)

(1) 第16次調査（第3図）

郡衙関連遺構の広がりを把握するため、正倉院北東側に4ヶ所調査区を設定し、調査を実施しました。その結果、1区から幅約6mを測る溝状遺構を検出するとともに、3・4区でこれまで確認されたことのなかった10～11世紀の竪穴建物1軒等を検出しました。

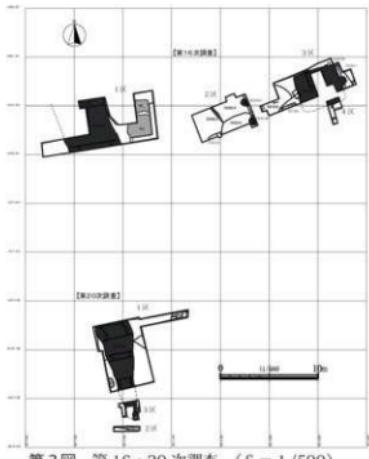
第12次調査で確認した掘立柱建物の内容を把握するため、影向寺に近い上原宿地区で3ヶ所調査区を設定し、調査を実施しました。その結果、第12次調査で検出した建物跡が、南北6間×東西3間の大型建物であることが判明するとともに、ほぼ同一場所で建替えられていることも確認できました。また、建物跡北側でも柱掘方を数基検出しました。

(3) 第18次調査

蟻山地区で正倉が検出された第8次調査区よりもさらに東側の、橋樹郡衙跡が立地する丘陵東端部で宅地開発計画が出されたことから、事前の試掘調査を実施し、3ヶ所の調査区を設定しました。その結果、2・3区から南北に延びる溝状遺構を検出しました。

(4) 第19次調査

第18次調査の調整中、伊勢山台地区の国史跡指定地西側近接地で個人住宅建設計画が出されたことから、事前の確認掘調査を実施しました。その結果、攢乱が多く見られたものの、東西に並ぶ柱掘方を検出しました。



(5) 第20次調査(第3図)

第16次調査1区で検出した溝状遺構は丘陵北側斜面を下るとともに、南側へも続くことが推測されたため、南側の状況確認を行うよう橘樹郡衙遺跡群調査整備委員会の指導を受けたことから、第16次調査南側に3ヶ所の調査区を設定し、調査を実施しました。その結果、第16次調査で確認した溝状遺構が南側に続く状況は把握できなかったものの、千年伊勢山台北遺跡で検出された正倉院北側を区画する溝の東側延長部分と想定される溝状遺構を検出しました。

3. 調査の成果からの考察

橘樹郡衙跡第16～20次調査を実施した結果、橘樹郡衙の新しい知見が得られるとともに、今後の課題も出てきました。

(1) 正倉院の規模と構造(第4図)

平成27年度の調査での大きな成果の1つが、第18次調査で正倉院東側の区画と想定される溝状遺構を検出するとともに、第20次調査で正倉院北東側の区画溝も検出し、正倉院の規模が概ね明らかになったことです。

これまでの調査で正倉院の北側・西側・南側については区画の一部が発見されており、今回東側の区画を確認したことで、正倉院の規模が東西約210mであることが判明しました。当時の唐尺(約30cm)で換算すると、概ね700尺になることから、正倉院がある程度計画性をもって造営されたことを示すものと言えます。

また、正倉院北側の区画溝が第20次調査地点ではほぼ直角に南へと向きを変え、しかも途中までしか見られないことも確認できました。これは、丘陵平坦面に北東から入り込む小さな谷を意識したものと考えられることから、正倉院が立地する丘陵平坦面がほぼ現在と同じ広さであったことの証拠といえ、古代の景観復元に貴重な所見を与えてくれました。



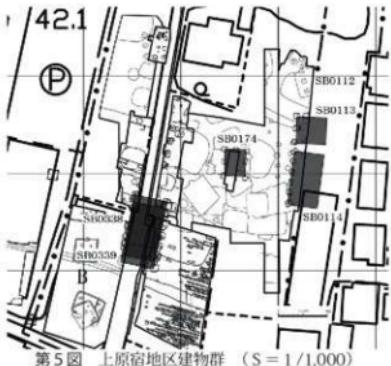
第4図 橘樹郡衙跡正倉院 (S = 1/1,500)

正倉院は、南側の区画東側がほとんど明らかになっていますが、確認された区画溝と北東側の谷によって概ね北側、西側、東側、中央部の4地区に分けることが可能となりました。北地区は総柱建物である正倉が南北2列、東西に5棟以上、整然と並んでいた地区で、西地区は大型総柱建物である法倉が設置された地区、東地区は北地区同様、総柱建物である正倉が設置された地区、中央部はほとんど建物が確認されていない広場的空間と考えられます。

(2) 上原宿地区的建物群(第5図)

橘樹郡衙跡上原宿地区で実施した第17次調査では、第12次調査で検出していた大型建物2棟(SB0338・0339)の北側部分を検出しました。その結果、SB0338が5間×3間、SB0339が6間×3間の南北棟であることが判明しました。SB0339は推定床面積は約97m²を測り、正倉院法倉に次ぐ、橘樹郡衙跡でこれまでに確認した2番目に規模の大きい建物跡となります。

両建物は、ほぼ同一場所で建替えられており、SB0339→SB0338という新旧関係が把握できました。柱掘方から、建物時期を判別できる資料が



第5図 上原宿地区建物群 (S = 1/1,000)

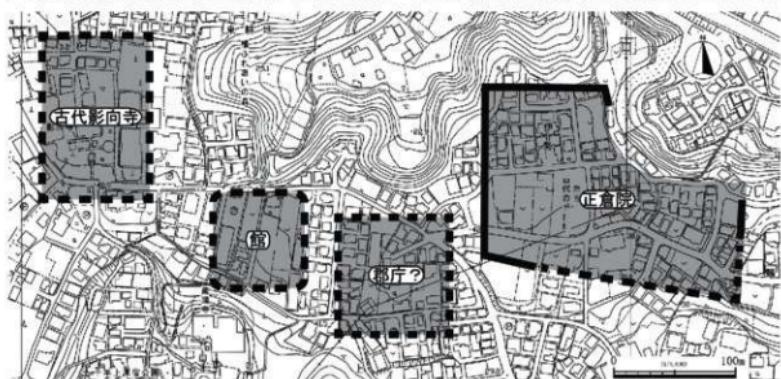
ほとんど出土しませんでしたが、SB0338の柱抜取穴から9世紀中葉～10世紀の土師器が出土していることから、それに先行するSB0339は8世紀～9世紀前葉と想定されます。両建物の柱掘方は大規模なもので、耕作による攪乱を抜いて確認したところ、掘方は一辺1～1.5m、深さ約1.2m程ありました。

また上原宿地区では、SB0338・0339の北東側で大型の掘立柱建物跡(SB0114)等の複数の建物が確認されています。これまで発見されている橘樹郡衙跡の建物主軸方位が、7世紀後葉

～8世紀初頭は西に傾いてるもの、8世紀前葉～後葉以降はほぼ正方位になる特徴が見られますが、上原宿地区的建物群は、やや東に建物主軸方位が傾いています。これが時期差なのか、建物の性格の違いなのかは不明ですが、上原宿地区的建物群は同じ性格の施設を構成していたと考えられます。ではその施設とは何かを考えてみると、SB0339という大型建物が存在する等、郡衙の中の主要施設である可能性が高いと想定されます。郡衙主要施設のうち、正倉院は確認されているので、残る施設(郡庁、館、厨家)で検討してみると、郡庁の特徴である規則的な建物配置は取らず、厨家で見られる龕を有する建物もないとから、消去法ではありますが、館である可能性が最も高いと考えられます。

(3) 橘樹郡衙主要建物の想定(第6図)

第17次調査で検出した大型建物跡等から、上原宿地区的建物群が館であると推測しています。このことから考えると、郡衙が立地する通称「伊勢山台」・「影向寺台」と呼ばれる丘陵東端に正倉院、西端に古代影向寺が所在し、今回影向寺寄りの上原宿地区に館が所在するとなれば、自ずと正倉院と館の間に広がる幅約120mの空間に郡衙



第6図 橘樹官衙跡群主要施設想定図 (S = 1/4,000)

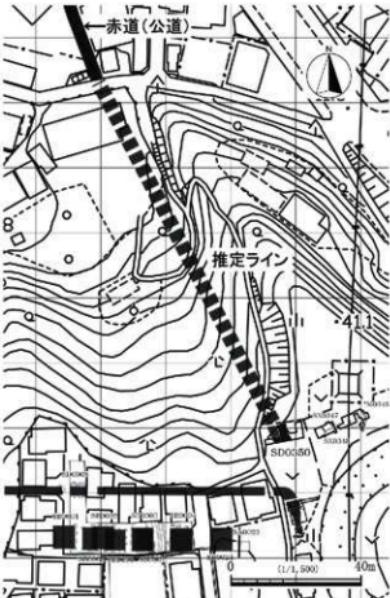
が眠っている可能性が高いと推定されます。厨房施設を有する厨家は、水場との関係性が強いと考えられることから、湧水が見られる郡衙跡北側の谷戸に近い辺りではないかと推測していますが、現状では場所は不明です。

(4) 新たな遺構の発見（第7図）

これまで平成27年度に実施した調査成果から、橘樹郡衙跡の主要施設等について話をしてきましたが、平成27年度の調査では初めて発見された遺構がありました。それが第16次調査の溝状構（SD0350）です。

SD0350は、正倉院北東区画外側の丘陵先端部に位置し、南東から北西へと丘陵斜面を下る様相が見られました。調査区の関係で、急峻な斜面に入る手前までしか確認できませんでしたが、溝の規模等からそのまま斜面を下っていく可能性は高いと考えされました。SD0350の構築時期は、溝の覆土中層付近で板碑が出土していることから、溝の構築時期は中世以前である想定されますが、古代まで遡るものかどうかは不明です。ただし、SD0350は遺構確認面で幅約6m、底面約3mを測る大型の溝であり、こうした大規模土木工事を実施できる状況としては、橘樹郡衙の関係が最も考えられることから、古代の溝である可能性は高いと言えます。

また、SD0350を丘陵斜面方向にまっすぐ伸ばしていくと、ある場所にあたります。ある場所とは、現在は家と家の隙間でほとんど道としては使われていない赤道（あかみち・公道）です。赤道は近世以前からの道であることが多いので、この赤道とSD0350の延長線が合うということは、かつて丘陵下から丘陵上まで道があった可能性を推測されます。逆に赤道を北へ進むと「北浦」という地名が残っていることから、古代には北浦付近に津があり、そこまで運んだ荷を赤道→SD0350の道を通って丘陵上の正倉院へと運んだ、そうし



第7図 SD0350 推定ライン ($S = 1/1,500$)

た郡衙の搬入路である可能性も検討していければと考えています。

4.まとめ

平成27年度に実施した5回の調査（第16～20次調査）では、橘樹郡衙跡の新たな知見が多く得られ、影向寺遺跡を含む橘樹官衙遺跡群の価値をさらに高めることになりました。

しかし、平成27年度調査の原因にもありました。最近橘樹官衙遺跡群及びその周辺では、戸建住宅の改築や宅地開発工事が非常に多く発生しており、市民や関係者の協力を得ながら遺跡を保存できるよう調整していますが、その保存が危ぶまれている場所も一部あります。現在、橘樹官衙遺跡群の歴史的価値をしっかりと確認しつつ、将来にわたり貴重な文化財として守り伝えていくよう、保存活用計画の策定に取組んでいますが、

その検討とともに、橘樹官衙遺跡群の全容解明を目指して今後も継続的に調査を実施するとともに、

市民が広く関心をもってもらえるよう公開・活用をしっかりと行っていきたいと考えています。



写真1 SD0350（第16次調査）



写真2 SB0338・0339 検出状況第17次調査



写真3 正倉院東側区画溝（SD0395：第18次調査）



写真4 SD0395 断面（第18次調査）



写真5 正倉院北東側区画溝（SD0008：第20次調査）



写真6 遺跡見学会（第17次調査）

伊勢原市 上柏屋・秋山上遺跡第2次調査、上柏屋・秋山遺跡
 — 繩文時代後期前半の集落と中世～近世の遺構群 —

むらまつ あつし
村松 篤

所在地 伊勢原市上柏屋地内
 調査機関 公益財団法人かながわ考古学財団
 調査担当 村松 篤、砂田佳弘、池田 治、
 後藤喜八郎、田村良照、曾根博明、
 渋谷正信、塚田順正
 調査原因 新東名高速道路建設
 調査期間 2015年4月1日
 ～2016年11月終了予定
 調査面積 6,819 m²



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

1. 遺跡の立地

両遺跡が所在する伊勢原市は、北は丹沢山地の一部である大山東麓の扇状地から南の平塚市へと広がる平野部に至る山地・丘陵・台地・平野からなる表情豊かな地形をなしている。遺跡は伊勢原市の中央部、小田急小田原線の伊勢原駅より北へ約2kmに位置し、上柏屋扇状地の渋田川支流に囲まれた標高60mほどの南北約1.7km、東西約0.6kmの一支部に立地している。台地の周縁は比高差10mほどの崖線で囲まれ、平坦な台地頂部は西から東に向い、緩やかに傾斜している。本調査区はこの台地の北縁沿いで「くの字」に屈曲する縁辺に位置し、平坦面から北斜面にかけて遺構が検出されている。上柏屋・神成松遺跡などの縄文時代から中世・近世に渡る遺跡が周辺に分布する。また、同じ支台上には、上杉定正の居館跡と伝わる糟屋館跡があると伝わり、西側の御伊勢森遺跡の大学建設に先立つ発掘調査では、中世の建物跡と断面V字状の大溝と土壙が確認された。上柏屋・秋山遺跡の範囲内には糟屋館跡「大門跡」の石碑が地元で建立され、南500mには太田道

灌の墓所がある洞昌院が位置している。

2. 調査に至る経緯と調査経過

上柏屋・秋山上遺跡と上柏屋・秋山遺跡の発掘調査は、中日本高速道路株式会社が進める新東名高速道路建設事業の調査である。伊勢原市域での新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査は、中日本高速道路株式会社東京支社厚木工事事務所・神奈川県教育委員会・公益財団法人かながわ考古学財団の三者で、締結された「第二東名高速道路建設事業に伴う伊勢原市域埋蔵文化財に関する協定」に基づき、実施している。両遺跡の発掘調査は、平成27年4月1日から20区及び21区の調査から開始した。当初、糟屋館跡として届け出ていたが、平成28年度になって、上柏屋・秋山上遺跡と上柏屋・秋山遺跡として名称が定まった。なお、上柏屋・秋山上遺跡は第2次調査となる。ただし、両遺跡は連続する同一遺跡であり、遺跡の単位で考えれば、20区西の埋没谷から東に広がる平坦面から北斜面にかけての遺構群を一括して捉える必要がある。

3. 調査の概要

(1) 旧石器時代

旧石器時代の調査は、20区を中心に11個所の $2 \times 2\text{ m}$ の試掘グリッドを設定して調査を行い、試掘グリッド3個所でB B 1層から剥片が出土し、それぞれ拡張し調査を行った。2号石器集中は、ナイフ形石器を主体とし、1,000点を超す剥片類が出土した。下部からは2基の礫群、1基の配石が検出された。

(2) 繩文時代

縩文時代の遺構は、後期前半が主体で、竪穴住居跡10軒、配石遺構9基、埋没谷などが検出された。

20区西に位置する縩文時代の谷は、最も深いところで10m以上あり、底面は南から北に向かい緩やかに傾斜している。谷底からは15,000点を超す縩文土器片や石器・礫が分布し、台地の上の集落跡と連動して、遺跡が形成されていたことが推定できる。また、21区北からも遺物が密集する縩文時代後期の埋没谷が発見され平坦に見えるこの扇状地も小支谷によって複雑に開析されていたことが推定される。この深い谷を望む台地上に、敷石住居を中心とする9軒の住居跡が発見された。そのうちの2軒はいわゆる環礫方形配石遺構で、大型の竪穴住居に二重の環礫が巡らされている。そのうちの1軒で外帯と内帯が交差する部分が確認され、環礫にも新旧があることがわかった。また、入口部分には周堤礫と呼ばれる大形礫を壁状に組んだ遺構が発見されている。

21区南の平坦地から縩文時代後期の配石遺構が径30mの範囲から9基検出され、大型の石皿や立石・石棒を起立させた配石遺構が発見された。無頭の石棒は、近くから出土した頭部が接合し復元された。周辺には竪穴住居等の遺構や遺物包含層が見つからず、集落内の特殊な領域として想定できる。

(3) 古墳時代～奈良平安時代の遺構群

古墳時代の遺構としては、20区の谷際に位置する住居跡と22区北で同軸の3軒の後期の竪穴

住居跡が検出された。

奈良・平安時代では、20区で台地上から竪穴住居跡が検出され、谷の中からは水場遺構が発見された。水場遺構は木杭で板類を組み、谷の上流からの水量を堰き止めるために作られている。下面から木棒で囲われた井戸枠が検出された。21区南では、奈良・平安時代の竪穴住居4軒と掘立柱建物から構成される集落が発見され、ブロック的に集落が点在する様子がうかがえる。

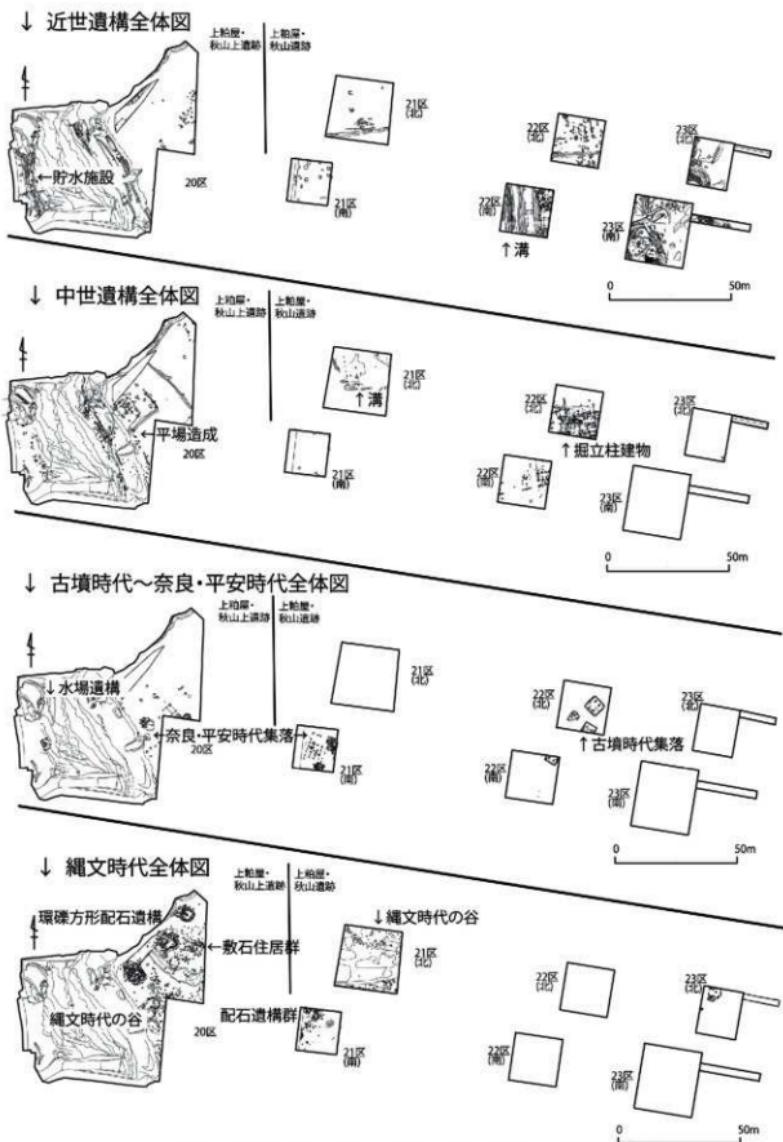
(4) 中世～近世の遺構群

今回の調査区では、中世から近世にかけての遺構は調査区全体にわたって発見され、斜面地に平場を造成しながら土地利用を行っている。

20区では、埋没谷に面する東側の緩斜面を大きく平場造成を行い、そこに中世～近世の掘立柱建物が確認された。また、埋没谷の西側の斜面を利用して掘られた近世の溝の途中に、廻木を渡しそこに礫を積んだ水をためる貯水施設と考えられる遺構が発見された。他に茶臼が検出された井戸や台地の周辺を区画する堀も発見された。21区北からは中世後半に位置づけられる幅3m、深さ1mの溝が確認され、22区では、近世前半の深い溝が確認され、中世まで遡る掘立柱建物も検出されている。

4. まとめ

本遺跡の調査では、旧石器時代から近世に渡る遺構が発見された。縩文時代後期の集落は、台地平坦面の配石遺構、斜面地の集落跡、縩文時代の深い谷が連動するように発見されたことは、この地域の縩文時代景観を復元するための重要な発見といえる。また、奈良・平安時代の集落も低地部の水場遺構との関係を考えられ興味深い。中世以降では、堀と推定される溝や土坑墓などが見つかり、いまだ位置が確定しない糟屋館跡発見の糸口となることも期待される。両遺跡の近世前半の遺構群も特徴的で、中世から近世に移り変わる上粕屋周辺の姿を考える上で、今後も続く周辺の調査成果が注目される。



第2図 上柏屋・秋山上遺跡、上柏屋・秋山遺跡時代別変遷図



写真1 配石遺構 (21区南)



写真2 J7号住居 (20区)



写真3 縄文時代の谷 (20区)



写真4 古代、井戸枠 (20区)



写真5 近世、貯水施設 (20区)



写真6 近世、井戸・茶臼出土 (20区)



写真7 中世、溝 (21区北)

秦野市 横野山王原遺跡

—秦野地方の富士山宝永大噴火の被害と復興—

あまの けんいち
天野 賢一

所在地 秦野市横野 216-1 外

調査機関 公益財団法人かながわ考古学財団

調査担当 天野賢一・畠中俊明・三瓶裕司・

岡 稔・諫訪間直子・柏谷 隆・

濱谷正信・山田仁和・瀬田哲夫・

塙田順正

調査原因 新東名高速道路建設事業

調査期間 2015年4月1日～2016年3月31日

調査面積 13,953 m²

1. 遺跡の立地

遺跡は、小田急線渋沢駅の北3 kmの秦野盆地縁辺部に所在し、丹沢山地裾部にあたる。調査地点は、北側を葛葉川支流の唐沢川、南側は矢坪沢に挟まれた、北西から南東に長く延びる台地の幅は約200 mで、調査地点の標高は230～250 mの緩斜面となっている。これまで本格的な発掘調査の少ない地域で周辺部の様相は明らかでなかったが、近隣の遺跡では秦野盆地中央部を流れる水無川左岸の段丘上に所在する稻荷木遺跡の調査で、縄文中期末葉の敷石住居跡が発見されている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設事業に伴うものである。秦野市内では寺山中丸遺跡、蓑毛小林遺跡、寺山角ヶ谷戸遺跡、秦野市No.125遺跡、柳川竹上遺跡とともに実施されている一連の発掘調査である。横野山王原遺跡は、秦野サービスエリア建設事業部分にあたり、発掘調査は2014年10月から着手している。



第1図 遺跡位置図

3. 調査の成果からの考察

これまでに縄文時代後期の竪穴住居1基・集石62基・土坑44基、弥生時代の土坑27基、奈良・平安時代の溝2条・道4条・土坑171基などが発見されている。

縄文時代では、早期条痕文系土器がまとまって分布している。野島式土器のほか、東海系の絡状体圧痕文を有する土器が主体を占めていることが特筆される。

弥生時代では、深さ1.5～1.9 mで、底面が長方形となる深い掘り込みを有する土坑が発見されている。特徴から落とし穴と考えられるもので、覆土上部には、弥生時代の黄褐色スコリア層が堆積していることから、時期の詳細は明らかではないが、弥生時代の所産であると考えられる。

奈良・平安時代では、耕作に伴うと考えられる円形土坑が発見され、尾根部を横断するように道などが発見されている。以降、近世に至るまで連



第2図 横野山王原遺跡全体図（近世宝永火山灰廃棄遺構）

綿と耕作地として利用されていたと考えられる。

近世の調査では、宝永火山灰の廃棄遺構が調査区全体で発見されていることが特筆される。本遺跡で発見された宝永火山灰の廃棄遺構は、幅0.5m前後の溝状を呈し、併走して連続する。長さは2m前後から、20mを超えるものまで長短があり、直線的に並ぶものが主体であるが、曲線的に掘られているものなど、多様な形態が見られる。これらは連続する廃棄の単位と捉えられ、地割り毎に同じ形態のものがまとまっている。また、現在の地表面で見られる雑壇状の土地区画は、この廃棄の単位と一致しており、江戸期の地割りがほぼ踏襲されている。

出土遺物は、遺構の性格から極めて少ないが、18世紀前半の陶器（摺絵皿）・煙管・砥石が出土している。

富士段宝永大噴火

1707(宝永4)年の噴火は、当時「砂降り」と呼ばれ、降灰により静岡県駿東郡から神奈川県西部に極めて甚大な被害を及ぼし、南関東のほぼ全域にその影響を与えていた。

宝永噴火の4年前にあたる1703(元禄16)年に起こった巨大地震により関東地方では多くの災害が発生している。さらに1707(宝永4)年の10月には東海道沖から南海道沖を震源域とする巨大地震を受け、連続する二つの大地震と沿岸を襲っ



写真1 横野山王原遺跡 空中写真（南東から）



写真2 出土遺物（陶器）



写真3 出土遺物（煙管）



写真4 出土遺物（砥石）



写真5 出土遺物（砥石）

た大津波、さらにその49日後に起こった宝永大噴火と江戸時代屈指の自然災害が連続している。富士山の宝永大噴火では、富士山裾野にあたる静岡県駿東郡及び御殿場市周辺の御厨地方では、多量の火山灰により集落とともに耕作地が壊滅し、「亡所（荒廃地）やむなし」とされた。

また、富士山の東麓部を流れる鮎沢川、神奈川県西部の西丹沢を流れる河内川が合流する酒匂川下流域では、降灰地域から流入した火山灰の影響で酒匂川の氾濫が繰り返し起き、大規模で長期的な二次災害が続いた。

秦野地方の被害

神奈川県西部にあたる秦野地方においても宝永噴火に関係する文献史料は多数残されている。秦野市内の文献では、「一尺四・五寸降積、田畠野山一面砂場罷成」と記載され、一帯は約45cmの降灰により火山灰に覆われた状況が把握できる。噴火の翌年にあたる「宝永五年閏一月砂降りに付き横野村訴え」(史料1・2)では、1703年の元禄大地震、日照り、水害、嵐など立て続けに見舞われた自然災害により生活が困窮している中での宝永噴火によりさらなる被害の窮状が表現されている。



写真6 横野山王原遺跡 空中写真（北東から）



写真7 宝永火山灰廃棄遺構調査状況

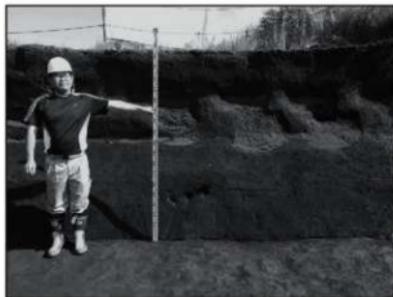


写真8 宝永火山灰廃棄遺構土層断面図

さらに「宝永五年閏月一月横野村砂除け書上げ」(史料3・4)では、田は全て埋まり、畠地も壊滅状態であるが、「砂うなへくるミ又はほりうつミ」=(砂を鋤き包み又は掘り埋め)により秋作を仕付けるとあり、田畠をいち早く復旧していく様子が記載されている。

横野山王原遺跡の調査で確認された宝永火山灰廃棄遺構は、文献に記載された土壤改良・天地返しの方法の一つである「ほりうつミ」であると捉えられる。

また、横野山王原遺跡の西方1.5kmにあたる秦野市三郷部地区所在の秦野市No.125遺跡での土層堆積では、宝永火山灰と耕作土が3~4層にわたって互層となっている状況が確認されている。これは鋤などの工具により土壤を攪拌してい



第3図 天地返しの方法（イラスト 土砂崩埋蔵）

る状況を示し、前述の文献で鋤き包みと表現された「うなへくるミ」にあたると考えられる。「宝永七年四月菖蒲・八沢・三郷部・柳川四か村田畠開発願い」(秦野市 1982)では、噴火3年目を経過した三郷部村においても田畠の復旧が遅れ、現状はまだ半分のみにとどまっていること、そして「うないくるみ」によって復旧した耕作地では、仕付けた麦作も砂地であるため地力がないため育ちが悪く、救済を訴えていることも把握できる。

4.まとめ

横野山王原遺跡で発見された宝永火山灰廃棄遺構は、これまでにも県西部の各遺跡を主体に同様のものが調査されているが、1万m²を超える規模での発見は特筆される。その様子は台地一面に広



史料1 宝永五年間一月砂降りにつき横野村訴え (所蔵 横野自治会)

宝永五年四月一月砂降りにつき横野村訴え	
申急口二事以申上候事等	横野村之領、數年常繁行仕、朔式治四、五年以來大分出
請作あらん、百町之家耕田仕地御座候	前田山王原仕地等、六年以來一人死不レ申、家前田山王原少々、支
未作仕地、申年灌水三田畠多々レし、石入	も不作仕地、申年灌水三田畠多々レし、石入
砂入など自耕分被成爲難事百姓自力方仕、段々に御年貢古付、西、皮兩片二斗出仕、六年夫食不足仕	砂入など自耕分被成爲難事百姓自力方仕、段々に御年貢古付、西、皮兩片二斗出仕、六年夫食不足仕
題三、去秋度之大難、其放學延り、一切用無御	題三、去秋度之大難、其放學延り、一切用無御
座、及湯冷百姓御坐候、去年稻家老御座過	座、及湯冷百姓御坐候、去年稻家老御座過
之能、而無て申上得共、御子々、之無御座共、	之能、而無て申上得共、御子々、之無御座共、
申中名主相國被申候は、御通頭を御知行一門之	申中名主相國被申候は、御通頭を御知行一門之
砂場頭一門被成、先御年貢古付、少財助可、被	砂場頭一門被成、先御年貢古付、少財助可、被
と被申、例四十日より御代、諸道具	と被申、例四十日より御代、諸道具
金賣二人、同廿四、五一迄日々行、金子調御得共、	金賣二人、同廿四、五一迄日々行、金子調御得共、
小少免往仕候、内申上應、相共、達て御願も不	小少免往仕候、内申上應、相共、達て御願も不
仕、先御在仕候成、内申上應、相共、義身資政仕見免、	仕、先御在仕候成、内申上應、相共、義身資政仕見免、
最早当月廿六、不疑大無御座候。	最早当月廿六、不疑大無御座候。
一月十四日御家老御座候、當時御通頭元御	一月十四日御家老御座候、當時御通頭元御
事馬上苦心申上御候は、風氣あらん御通頭元御	事馬上苦心申上御候は、風氣あらん御通頭元御
申、從御公派御ハ御通頭分被御有御事	申、從御公派御ハ御通頭分被御有御事
山王原村、被上正、廟村、御通頭殿門御名主、相國	山王原村、被上正、廟村、御通頭殿門御名主、相國
以目申上御得ば、とがくかをもとめ、扶持にまつま	以目申上御得ば、とがくかをもとめ、扶持にまつま
子供、病丸申中御、御通頭、御子々御御座得共、年寄、	子供、病丸申中御、御通頭、御子々御御座得共、年寄、
此度嘗有砂降り御通頭御見り御通頭候、村窮夫食之	此度嘗有砂降り御通頭御見り御通頭候、村窮夫食之
事馬上苦心申上御候は、風氣あらん御通頭元御	事馬上苦心申上御候は、風氣あらん御通頭元御
申、從御公派御ハ御通頭分被御有御事	申、從御公派御ハ御通頭分被御有御事
山王原村、被上正、廟村、御通頭殿門御名主、相國	山王原村、被上正、廟村、御通頭殿門御名主、相國
以目申上御得ば、二二、三日相改可申と被御	以目申上御得ば、二二、三日相改可申と被御
候、今月三日候、一月廿六分米交毛石七十五	候、今月三日候、一月廿六分米交毛石七十五
升五合男安下之御面相接、被下接候、	升五合男安下之御面相接、被下接候、
有奉申候、誠百姓申田糧之手多々、振月より御地	有奉申候、誠百姓申田糧之手多々、振月より御地
頭丈文仕侍候候也、今月三日二十六	頭丈文仕侍候候也、今月三日二十六
是一日之次三日、百町之家耕田仕地御座候	是一日之次三日、百町之家耕田仕地御座候
中部波多野内去冬連雨之々々江戸へ下り候成、横野	中部波多野内去冬連雨之々々江戸へ下り候成、横野
村三二名主を罷下候矣、百姓たすかり申度候、	村三二名主を罷下候矣、百姓たすかり申度候、
此口上字下、申上候、以上	此口上字下、申上候、以上

史料2 宝永五月間一月砂降りにつき横野村訴え (秦野市史 第二巻 近世資料編I)

宝永五年四月一月砂降りにつき横野村訴え	
相州大住郡	一田畠主右衛門知行所
六船主給五町給内、寺内御給給事	内宿印田 村領、仙院
此わけ	三瓦五枚五反五歩 開免自力三疊屋候
田方	六船主五反五歩 砂うなぐる又仕方うづ仕、當
内宿印田 村領、仙院	正月廿四月申中御免化、御秋作仕村 可申候。
以上	三瓦五枚五反五歩 開免自力三疊屋候
相州大住郡横野村	六船主五反五歩 右の御免分は御取の事無今御段々御取け 内宿印田 村領、仙院
名主、由田右衛門	御免御取候事無、當御御仕村可申候、御御仕初如御御座候
年寄、五郎兵衛	以上
同、御御門	宝永五年四月 相州大住郡横野村
(所蔵 横野自治会)	

史料3 宝永五年間一月横野村砂除け書き上げ
(所蔵 横野自治会)史料4 宝永五年間一月横野村砂除け書き上げ
(秦野市史 第二巻 近世資料編I)

がりを持っており、広大な面積の耕作地を、膨大な労力をかけて復旧している様子が明らかとなった。さらに横野村の文献など各史料によって、それが裏付けられたことも大きな成果であると言える。

耕作地の「天地返し」は河川氾濫による水田などの復旧に土壌改良として用いられている手法で、岡山県備前地方や河内平野などで調査事例が

ある。また水害だけでなく、火山灰の降灰では浅間山噴火による火山灰の降灰にも用いられている事例がある。

宝永の噴火による火山灰が厚く堆積した地域では、砂置き場を設けているが、耕地面積が減少するため、その一部に土を盛り畳地を復旧する「島畑」という手法もとられている。これら「天地返し」



写真9 秦野市No.125遺跡 近世調査状況



写真10 秦野市No.125遺跡 近世土層堆積状況

や災害復旧の痕跡は、その起源や広域的な確認事例は少なく、今後の研究課題であると言える。

引用・参考文献

小山町史 1991「小山町史」第二巻 近世資料編 I
小山町

小山町史 1991「小山町史」第七巻 近世通史編 I
小山町

神奈川県立博物館 2006「富士山大噴火
—宝永の『砂降り』と神奈川—」

北原糸子・松浦律子・木村玲欽編 2012

「日本歴史災害事典」吉川弘文館

北原糸子 2016「日本震災史 復旧から復興への歩み」
ちくま書房

御殿場市 1974「御殿場市史」I

古代中世・近世史料編 御殿場市役所

御殿場市 1982「御殿場市史」別巻 I 考古・民俗編
御殿場市役所

御殿場市 1982「御殿場市史」8 通史編上
御殿場市役所

永原慶二 2015「富士山宝永大爆発」吉川弘文館
秦野市 1996「図説秦野の歴史」秦野市

秦野市 1982「秦野市史」第二巻 近世資料 I

秦野市

神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表遺跡一覧（第1~40回）

調査・研究発表会担当

第1回 1976年6月26日 稲毛市開港記念会議

1. 横浜市	横浜市立歴史博物館
2. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
3. 三浦市	三浦市立歴史博物館
4. 逗子市	逗子市立歴史博物館
5. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
6. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
7. 2. 横浜市	横浜市立歴史博物館
8. 8. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
9. 9. 逗子市	逗子市立歴史博物館
10. 10. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
11. 11. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
12. 12. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
13. 13. 三浦市	三浦市立歴史博物館
14. 14. 逗子市	逗子市立歴史博物館

第2回 1976年6月25日 稲毛市開港記念会議

15. 1. 横浜市	横浜市立歴史博物館
16. 2. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
17. 3. 三浦市	三浦市立歴史博物館
18. 4. 逗子市	逗子市立歴史博物館
19. 5. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
20. 6. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
21. 7. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
22. 8. 三浦市	三浦市立歴史博物館
23. 9. 逗子市	逗子市立歴史博物館
24. 10. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
25. 11. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
26. 12. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
27. 13. 三浦市	三浦市立歴史博物館
28. 14. 逗子市	逗子市立歴史博物館

第3回 1979年7月1日 稲毛市開港記念会議

29. 1. 三浦市	三浦市立歴史博物館
30. 2. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
31. 3. 逗子市	逗子市立歴史博物館
32. 4. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館 (子元)
33. 5. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館 (西谷)
34. 6. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
35. 7. 三浦市	三浦市立歴史博物館 (勝幡)
36. 8. 逗子市	逗子市立歴史博物館
37. 9. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
38. 10. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
39. 11. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館

第4回 1980年6月2日 稲毛市開港記念会議

40. 1. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
41. 2. 横浜市	横浜市立歴史博物館
42. 3. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館 (北・中)
43. 4. 逗子市	逗子市立歴史博物館
44. 5. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
45. 6. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
46. 7. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
47. 8. 三浦市	三浦市立歴史博物館
48. 9. 逗子市	逗子市立歴史博物館
49. 10. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
50. 11. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
51. 12. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
52. 13. 三浦市	三浦市立歴史博物館
53. 14. 逗子市	逗子市立歴史博物館

第5回 1981年7月5日 川崎市中原区民館

54. 1. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
55. 2. 横浜市	横浜市立歴史博物館
56. 3. 逗子市	逗子市立歴史博物館
57. 4. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
58. 5. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
59. 6. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
60. 7. 三浦市	三浦市立歴史博物館
61. 8. 逗子市	逗子市立歴史博物館
62. 9. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館 KOE-1地区 (9街)
63. 10. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
64. 11. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館 長柄町・源町・源町東
65. 12. 三浦市	三浦市立歴史博物館
66. 13. 逗子市	逗子市立歴史博物館

第6回 1982年7月1日 川崎市中原区民館

67. 1. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
68. 2. 横浜市	横浜市立歴史博物館 (上野) (横須賀)
69. 3. 逗子市	逗子市立歴史博物館
70. 4. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
71. 5. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
72. 6. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
73. 7. 三浦市	三浦市立歴史博物館 (新吉良地区)
74. 8. 逗子市	逗子市立歴史博物館
75. 9. 藤沢市	藤沢市立歴史博物館
76. 10. 伊勢原市	伊勢原市立歴史博物館
77. 11. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館 (長柄町・源町・源町東)
78. 12. 三浦市	三浦市立歴史博物館

第7回 1983年10月30日 稲毛市開港記念会議

79. 1. 横須賀市	横須賀市立歴史博物館
80. 2. 横浜市	横浜市立歴史博物館
81. 3. 逗子市	逗子市立歴史博物館

82. 4・横浜市 野毛町	種子島遺跡	鶴屋道吉・土井義行・百瀬志水
84. 5・福岡市 中洲・加和田遺跡	中洲・加和田遺跡	佐々木義・浅野・寛
85. 6・横浜市 風見町・大塚第1地区遺跡群	風見町・大塚第1地区遺跡群	大川・道・木村裕紀・西田・義
87. 7・横浜市 山下・大塚遺跡	山下・大塚遺跡	内藤・道・相馬・義
88. 9・横浜市 大森東遺跡	大森東遺跡	高橋章・那・伊達紀生
89. 10・横浜市 片瀬大森遺跡	片瀬大森・大森遺跡	寺田重夫・澤田大輔
90. 11・横浜市 若狭・大森遺跡	若狭・大森遺跡	伊藤義芳・竹内・義・野口和人
92. 12・横浜市 根岸・大森遺跡	根岸・大森遺跡	小林義典・下川光男・飯田五郎
第1回 1954年7月1日 鹿児島市文化会館ホール		
93. 1・大垣市 北城遺跡	北城遺跡	戸田義由・小林義典・鷲生勝司
94. 2・横浜市 元町	元町	上川・道・木村義典
95. 3・横浜市 北山	北山	坂本・義・鈴木・直臣
96. 4・横浜市 愛・見石遺跡	愛・見石遺跡	小宮原義・山口・珠夫・石井・寛
97. 5・尼崎市 下里・大久保遺跡	下里・大久保遺跡	川藤・道・吉川義明・大藤義久
98. 6・横浜市 野毛・大森遺跡	野毛・大森遺跡	飯田・義
99. 7・伊豆長岡市 小笠原古墳	小笠原古墳	飯田・義・鈴木義典・佐藤義久・喜多雄一
100. 8・横浜市 西小金井遺跡	西小金井遺跡	久保義・後藤義久郎
101. 9・横浜市 西小金井遺跡	西小金井遺跡	西田・鈴木利厚
102. 10・横浜市 西小金井遺跡	西小金井遺跡	西田・西田義六
103. 11・茅ヶ崎市 内八塚山・茅ヶ崎	内八塚山・茅ヶ崎	坂平健
第9回 1955年6月2日 大和市中央文化会館ホール		
104. 1・大和市 北条城跡	北条城跡	大川・道・北条義典・鷲尾・勲
105. 2・横浜市 元町	元町	戸田・道・小林義典・田代邦夫
106. 3・横浜市 古谷金古墳	古谷金古墳	坂本・義・鈴木・直臣
107. 4・横浜市 上大山遺跡	上大山遺跡	小宮原義・山口・珠夫・石井・寛
108. 5・横浜市 吹田・豊島遺跡	吹田・豊島遺跡	大川・道・木村裕紀・佐藤義久・喜多雄一
109. 6・横浜市 手八八日遺跡	手八八日遺跡	戸田・道・西谷・光夫・田村良則
110. 7・横浜市 濱田遺跡	濱田遺跡	小出義典・福田・義
111. 8・横浜市 大久保・大森遺跡	大久保・大森遺跡	川藤・道・加藤信夫・山上美智
112. 9・大和市 月夜野・中野・野原・野原第1地点	月夜野・中野・野原・野原第1地点	相田・義
113. 10・平塚市 西・北・宮	西・北・宮	小島義典
114. 11・小田原市 小田原城跡・丸の内	小田原城跡・丸の内	坂田根義・鷲尾・明順
第10回 1955年7月5日 鹿児島市文化会館		
115. 1・鹿児島市 中野町	中野町	森葉志忠
116. 2・鹿児島市 河原・小学校跡	河原・小学校跡	小出義典・山・川喜・伊藤義信
117. 3・鹿児島市 御所	御所	舟石健・鈴木・利和・野村義五・澤田多郎
118. 4・鹿児島市 御所	御所	鈴木・義
119. 5・鹿児島市 御所・丁子貝塚	御所・丁子貝塚	小出義典・大森義昇
120. 6・鹿児島市 御所・丁子貝塚	御所・丁子貝塚	大・鈴木・英・大森義昇
121. 7・鹿児島市 吉之郷・大森遺跡	吉之郷・大森遺跡	川藤・道・喜多義・喜多太和
122. 8・鹿児島市 吉之郷・大森遺跡	吉之郷・大森遺跡	山村義典
123. 9・鹿児島市 本浦遺跡 G.I.N.-E.地区	本浦遺跡 G.I.N.-E.地区	川藤義典
124. 10・鹿児島市 草山町	草山町	小島義典
125. 11・鹿児島市 草之子小金井群	草之子小金井群	大上義典
126. 12・鹿児島市 河原・中野	河原・中野	方間・道・鈴木信行
127. 13・鹿児島市 今ノ川前田遺跡・御成小学校内	今ノ川前田遺跡・御成小学校内	古田空一・鈴木義典・鈴木義郎
第11回 1955年8月16日 大和市中央文化会館		
128. 1・大和市 小山町	小山町	(余) 岩崎・義・西田・道・加藤久美
129. 2・横浜市 今之井町	今之井町	鈴木・道・秋田利明・加藤久美
130. 3・横浜市 西ノ口貝塚	西ノ口貝塚	坂本・義
131. 4・横浜市 牧之原町	牧之原町	山村義典
132. 5・横浜市 愛・見石	愛・見石	川村義典・喜多義
133. 6・横浜市 吉田・吉田町	吉田・吉田町	大川・道・木村義典
134. 7・横浜市 山ノ上・高木集団墓群跡	山ノ上・高木集団墓群跡	川藤・道・喜多義
135. 8・小田原市 小田原城跡 (大塚・根津木地)	小田原城跡 (大塚・根津木地)	大上・道・鈴木内輪
136. 9・小田原市 根津木地	根津木地	鶴屋・道・安藤義・安藤久美
137. 10・横浜市 御ノ口貝塚	御ノ口貝塚	鈴木・義
138. 11・横浜市 愛川町遺跡群 N. o.・S. o.・S.遺跡	愛川町遺跡群 N. o.・S. o.・S.遺跡	大川・道・喜多義・一・吉川好美・國川・義
139. 12・横浜市 鶴見町	鶴見町	清水信一・村上・道
140. 13・横浜市 鶴見町	鶴見町	川村義典
141. 14・横浜市 愛川町・鶴見台遺跡	愛川町・鶴見台遺跡	小川・道・鈴木信行
142. 15・横浜市 愛川町・鶴見台 (小山)	愛川町・鶴見台 (小山)	鈴木・道・喜多義・鈴木・義・坂本・道
第12回 1955年9月4日 幸運市中央公民館		
143. 1・幸運市 幸運町	幸運町	日野・道・土井義典・鷲尾・勲
144. 2・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
145. 3・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
146. 4・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
147. 5・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
148. 6・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
149. 7・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
150. 8・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
151. 9・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
152. 10・幸運市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
153. 11・大和市 長幡町	長幡町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
154. 12・相模原市 丁番町	丁番町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
155. 13・相模原市 幸運町	幸運町	鶴屋・道・大庭樹志・土井義典・日野・道
第13回 1954年9月3日 川崎市役所ミュージアム		
156. 1・横浜市 愛川町・高木集団墓群跡	愛川町・高木集団墓群跡	小林謙・鶴屋・道・佐野・千葉・萬郎
157. 2・川崎市 高木地区・高木集団墓群跡・鶴見遺跡	高木地区・高木集団墓群跡・鶴見遺跡	玉口・道・大庭樹志・鈴木・子
158. 3・横浜市 高木町	高木町	芦原義典
159. 4・横浜市 高木町・鶴見町・北高木	高木町・鶴見町・北高木	鶴屋・道・小林義典・山・松本
160. 5・横浜市 高木町・鶴見町・北高木	高木町・鶴見町・北高木	鶴屋・道・小林義典・山・松本
161. 6・横浜市 高木町・鶴見町・北高木	高木町・鶴見町・北高木	鶴屋・道・小林義典・山・松本
162. 7・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・小林義典・山・松本
163. 8・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・小林義典・山・松本
164. 9・小田原市 大塚・根津木地	大塚・根津木地	山本義・坂口・道
165. 10・小田原市 大塚・根津木地	大塚・根津木地	山本義・坂口・道
166. 11・横浜市 建町	建町	鶴屋・道・小林義典・山・松本
167. 12・小田原市 史跡・山田山	史跡・山田山	鶴屋・道・小林義典・山・松本
第14回 1955年9月30日 相模原市民ホール		
168. 1・横浜市 高木町・高木集団墓群跡の先史時代遺跡	高木町・高木集団墓群跡の先史時代遺跡	鶴屋・道・鈴木・義・坂本・道
169. 2・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・鈴木・義・坂本・道
170. 3・幸運市 今山町	今山町	安藤文・及川・義
171. 4・平塚市 王子ノ台遺跡 (西区)	王子ノ台遺跡 (西区)	高木・道・秋田・公介・坂本・道
172. 5・横浜市 野川町・野川町	野川町・野川町	鶴屋・道・高木・公介・坂本・道
173. 6・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・高木・公介・坂本・道
174. 7・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・高木・公介・坂本・道
175. 8・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・高木・公介・坂本・道
176. 9・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・高木・公介・坂本・道
177. 10・横浜市 高木町	高木町	鶴屋・道・高木・公介・坂本・道
178. 11・平塚市 新町遺跡	新町遺跡	日野・道・明石・義・青木俊朗・若林裕司
179. 12・横浜市 下川辺山遺跡	下川辺山遺跡	大河内義
180. 13・小田原市 小田原城跡・山ノ内山遺跡	小田原城跡・山ノ内山遺跡	戸田義由・小林義典

第15回 1991年9月29日 横浜市立教育ホール	
野村義人	「アーティストとしての活動と研究」
183. 1・山田川	宮城・斎藤詩絵先生（N. no. 9）講演此後当社
184. 2・横浜市	元横浜市長、元横浜市議会議員、元横浜市議会議長
185. 3・横浜市	元横浜市長、元横浜市議会議員、元横浜市議会議長
186. 4・茅ヶ崎市	元横浜市長、元横浜市議会議員、元横浜市議会議長
187. 5・横浜市	元横浜市長、元横浜市議会議員、元横浜市議会議長
188. 6・横浜市	元横浜市長、元横浜市議会議員、元横浜市議会議長
189. 7・横浜市	元横浜市長、元横浜市議会議員、元横浜市議会議長
190. 8・横浜市	元横浜市長、元横浜市議会議員、元横浜市議会議長

第16回 1992年9月27日 横浜市立図書文化館

192. 木本村	東野町	千代野
193. 建石町	今井町西側(原成小学校内)	向野新田町
194. 関町	関町	石丸、山田、關久、安藤文一
195. 菊谷町	大曾根町(同上)、唐津町	伊藤
196. 丹波若狭町	船岡(今庄)、船岡郡分界等	浪舟、佐、田坂、藏
197. 6. 池子町	池子(千葉) N.o. 4地点	長谷川、山本綱久
198. 鹿嶋町	鹿嶋市大字鹿嶋の鹿嶋	中、歌
199. 2. 竹原町	竹原	下野
200. 2. 竹原町	竹原	木村、中田、田村良良
200. 9. 姜野町	姜野	神作二
201. 10. 小田町	小田町市内に於ける園芸ローム層の調査	山口信義、鈴木利明、芦田昭也、小林真典
202. 11. 鶴居村	古河村	白石浩、鶴居正弘

第17页 1993年9月19日 吉林市文化局

24 大和帝

2105. 2-津輕市	第一海南自動車 No. 14 (二ノ宮・下呂谷) 潟浦	八戸田信一・立石久之・松前正太郎・「船の町」
2106. 南陽市	南陽川	佐藤義雄
2107. 三戸町	三戸川	長谷川一郎
2108. 五所川原市	五所川原川 (吉野川・五所川原川合流部)	日高野・大澤義典・吉野一打
2109. 久慈市	久慈川	大川一・吉田義重・西口一郎
2110. 須賀川市	須賀川市から来た天安地鳴泉	上村一穂
2201. 七戸町	下北佐竹川	佐藤義重
2202. 七戸町	七戸川	伊藤義重・大泽義典・土井向子・小林克利
2203. 七戸町	七戸川・前・田昌裕	宮本吉之
2204. 久慈郡会津町	若木大野川・御前野川	田代恵一・大庭・喜久・志藤仁治
2205. 小出町	木曾川・小出川・堀川	戸田義和・小森義典
第19回 1995年9月23日 川崎市中区市民館		
2206. 1-相模原市	相模川 (白井川) 滝淵	大泽正臣・長谷川洋子・栗原一男・富本直之
2207. 2-相模原市	相模川・白井川	芦川義則・山田一員
2208. 4-三浦市	舟着川	里田一幸
2209. 5-藤沢市	若狭川・横瀬川	河野一郎

第三回 亂世の始まり

2331	山口縣市	久木本町 久木本町新 久木本町新	山口縣八部 日野一郎・上原正人 福田一誠
2332	山口縣市	因幡町 因幡町新 因幡町新	山口縣文 吉川義之
2333	山口縣市	大村町 大村町新 大村町新	山口縣文 吉川義之・小林英美・西川謙郎・小林初也
2334	山口縣市	東廣島町 東廣島町新 東廣島町新	山口縣文 吉川義之・小林英美・西川謙郎・小林初也

第20回 1996年9月23日 圣ヶ崎市市民文化会館

上田　木々庵白　西久保源時野　高木良之助・大村清司・吉川義之・藤井秀男

237	2 小田原市	小田原城下・橋上宿町道路
238	2 鹿児島市	N = 47 路段

2005-05-04	24.57, 25.00	東洋古文書
2005-05-04	25.00	馬鹿狂想曲

740 三橋公司 善良不動産開拓

241	小翠屏市	碧快鹿群	芦山高岭石，小件琉璃、香田漆器。
242	小三里市	碧想尾凤翼飞凤群	田村高岭石
243	小二里市	半翠	中村一郎
244	小九里市	新极乐珊瑚红料 N.o. - 火焰	田村高岭石，田村一郎

245 16 增强货币 大额存款购

250 4 三浦市 在輪島口東南鰐洲六道崎
251 4 三浦市 仁代朴子御櫻御殿御坂入

2011-01-01	記念講演	歴史研究と考古学の実況 ——JR東日本「秀吉」の時代考証の蘇歌から——	小林尚男
2011-01-01	講演会	秀吉、さくらの御内裏	小林喜代重
2011-01-01	講演会	城下町の歴史と文化	川村天明・野崎義五郎・野中和夫
2011-01-01	講演会	城下町の歴史と文化	川名義重

2005 年 9 月 2 日

256_10 小田原市	愛宕山・朝霧城跡の丸山古墳	東山古墳・大高畠
256_11 幸手市	高麗塚古墳	帆立貝塚・高麗塚
256_12 小田原市	山王古墳	帆立貝塚・山王古墳
256_13 小田原市	小川原坂下町遺跡	小林遺跡・上石継古墳・諏訪御前跡
	諏訪上古墳	

259 13 海老名市 実時相場取引

第22回 1996年11月15日 猪良美術館	
260 1.大和物語	大和物語 配木版水滸傳
261 2.川崎市	多摩川 N.O. 仙鷺路
262 3.川崎市	多摩川 N.O. 仙鷺路
263 4.南足利市	足利城跡
264 5.鎌倉市	鎌倉城跡
記念講演	
	酒井洋介著「壬子太平記」世界

266. 7 建倉市	青森太郎河川遺跡群	宮田 順
267. 5 伊勢原市	江戸時代の土器と骨董	鶴見 明
268. 9 建倉市	中世建倉に亘る考古学調査の復元と説明	鶴見 明
269. 10 小田原市	久野下馬下遺跡第4次点	鶴見 明
270. 11 建倉市	近江・富士山	小林義典
271. 12 建倉市	宇津西遺跡とその歴史	原 康志
第23回 1999年9月12日 伊勢原市民文化会館		
271. 1 旗幡市	上・下曾根山遺跡	矢島國雄・小堀 裕
272. 2 伊勢原市	相模野原遺跡の石器と小石標遺跡	恩田 淳・井辺一徳
273. 3 小田原市	田代・今井の古墳文化時代・古墳時代の墓集	芦田哲也
274. 4 岩手市	中里遺跡第1次発掘	鶴見義夫
275. 5 岩手市	開拓農家の移入と貿易活動	鶴見義夫
276. 6 岩手市	馬子塚・鶴見塚	鶴見義夫
277. 7 平塚市	長門・仙人塚1・2号墳	鶴見義夫
278. 8 平塚市	神奈川県船橋大野の前山古墳	鶴見義夫
279. 9 伊勢原市	ヨーロッパ・アフリカの古墳	平本元一
280. 10 伊勢原市	成田山・御室山・御室山古墳	大川 清・渡辺 舜・青葉樹一・増田 誠
281. 11 伊勢原市	古墳時代の馬鹿塚と平安時代の木造結構を複数	鶴見義夫
282. 12 伊勢原市	津久井・井上山の古墳	吉藤義人・小柳栄治・野口泰司・伊藤和香・野坂優介・山根 岩
283. 13 旗幡市	霞ヶ浦の古墳	伊藤 道
第24回 2000年10月1日 鶴見大学会館		
284. 1 藤沢市	N.O. 106号墳	鶴井崇也・増田和夫・鶴見義夫
285. 2 大和市	鶴見の初期の古墳遺跡と河川利用	折井 球・曾田桂子・上小澤洋一
286. 3 原市	上原山遺跡と古墳時代の生活	江原輝輔
287. 4 原市	河原山遺跡と古墳時代の生活	戸田哲也・鍛 亮子
288. 5 原市	河原山遺跡と古墳時代の生活	矢野綱紀・小堀 裕
289. 6 原市	河原山遺跡と古墳時代の生活	土屋清秀
290. 7 平塚市	高田山遺跡と古墳時代の生活	中村喜重
291. 8 平塚市	高田山遺跡と古墳時代の生活	上原正人・川端清倫
292. 9 原市	原市1号墳の調査成果と伝化系	平木正一
293. 10 原市	原市山遺跡と古墳時代の生活	鶴見義夫・原田弘生
294. 11 建倉市	大久保山遺跡と古墳時代の生活	山本 勇子
295. 12 建倉市	大久保山遺跡と古墳時代の生活	山本 勇子
296. 13 藤沢市	西山遺跡と古墳時代の生活	中村喜重
297. 14 藤沢市	西山遺跡と古墳時代の生活	伊藤 齊・谷口 実
第25回 2001年10月13日 平塚市立中央公民館		
298. 1 横浜市	江戸の古事記	佐藤明生
299. 2 横浜市	江戸の古事記と江戸の土居町の調査	佐藤明生
300. 3 横浜市	N.O. 21号墳	鶴井崇也・松山順一・鶴見義夫・中川義人
301. 4 横浜市	扇石遺跡の石器と石器採集・瀬戸内海	鶴見義夫
302. 5 横浜市	扇石山遺跡	鶴見義夫
303. 6 横浜市	扇石山遺跡の貝塚と気泡	鶴見義夫
304. 7 横浜市	扇石山遺跡と古墳時代の貝塚	山田仁和
305. 8 横浜市	扇石山遺跡と古墳時代の貝塚	中幡山千子・鶴見義夫
306. 9 横浜市	扇石山遺跡と古墳時代の貝塚と貝殻	高谷健介
307. 10 海老名市	扇石山古墳群1・2号墳	押方みのる・山口正憲
308. 11 海老名市	扇石山古墳群と古墳時代の貝塚	(財) さがわ考古学財団 (長谷川京)
309. 12 平塚市	水塚1号墳	斎木秀雄・降矢順子
310. 13 建倉市	近點遺跡を 중심に	鶴見義夫
311. 14 建倉市	東山中丸遺跡	鶴見義夫
312. 15 建倉市	扇石山遺跡と多摩丘陵路に跨る古墳群	福田 誠
313. 16 建倉市	扇石山遺跡と古墳時代の貝塚	中川昇
314. 17 建倉市	扇石山遺跡と古墳時代の貝塚	大野 利
315. 18 建倉市	扇石山遺跡と古墳時代の貝塚	宮田 道
316. 19 平塚市	平塚市の遺跡概要	平塚市教育委員会
317. 20 平塚市	平塚市の遺跡と古墳	平塚市教育委員会
第26回 2002年11月24日 境川町文化会館		
318. 1 記念講演	主な遺跡とその歴史	川上久美
319. 2 旗幡市	旗幡人の歴史とその歴史	矢島國雄・小堀 裕
320. 3 旗幡市	上・下曾根山遺跡	鶴見義夫
321. 4 旗幡市	鶴見支那の歴史と文化	鶴見義夫
322. 5 中井町	鶴見の古墳群と古墳時代の貝塚	二瓶裕司
323. 6 施設	鶴見の古墳群と古墳時代の貝塚	市川正人・井澤 純・吉田政行・渡辺 外
324. 7 施設	鶴見の古墳群と古墳時代の貝塚	松山敬一
325. 8 施設	鶴見の古墳群と古墳時代の貝塚	大村廣司
326. 9 施設	鶴見の古墳群と古墳時代の貝塚	(財) 横浜市ふるさと歴史財団
327. 10 施設	鶴見の古墳群と古墳時代の貝塚	野口清史・花藤義夫

318 9 小田原市	小田原城下の矢杉連平木文部跡 武家領前段式武家領敷の調査	木村吉行・井関文明
319 10 小田原市	小田原城下の石垣と西子町 城下町としての特徴	山口剛志
320 11 横浜市	鎌倉時代 元代の土木技術を伝える作式砌石の調査 上野美奈	野内秀明
321 12 葛西町	船岡木造跡 鶴文式古代小字表記の跡(敷石)・柱記録 上野美奈	大野賀一

第27回 2005年10月19日 横浜市開港記念会館

322 1 藤沢市	港権地 横濱開港以前から既に属于博物館の出土出土	戸田智也
323 2 川崎市	江量今遺物群N.の調査 幕末明治前半の経済文脈の調査集落中心	北原實通・今泉克巳
324 3 横浜市	茅ヶ崎・西・谷保 茅ヶ崎の歴史と古文書の調査	飯本 郁
325 4 横浜市	横浜、支那の港町 横浜の古代化の水路網	上原正人
326 5 横浜市	大蔵地区の開拓と石川一虎跡 先代の開拓と後醍醐天皇と藤原氏の小規模な埋蔵集落を確認	青畠重一
327 6 草加市	記述調査 元代の開拓と土木工事による開拓地の調査	小林謙一
328 7 厚木市	丁子在古代A地盤 新石器時代の埋蔵集落と在原経営の発見	六戸裕信・村上吉正
329 8 厚木市	鶴山久保・猪俣 古墳第1号墳・第2号墳・第3号墳の調査	平本三一・中村喜代葉
330 9 織合町	無量寺 縦合式古代石室の確定式昭和清	森 幸子
331 10 神奈川県	佐賀神農社(伝玉作跡) 古式の御前御所の調査	福田 誠
332 11 湘南町	テキサスの埋蔵跡 海岸帶考古学的可能性	大島誠一
333 12 草加市	神の山古墳 近江・笠置	柳山浩一・渡辺直哉・朽木 篤・黒田英一・鶴井季也
		足挂芳雄

第28回 2004年10月3日 横浜市開港記念会館

334 1 厚木市	武家領の開拓と土木技術 横濱文化史の発展	高橋 和
335 2 横浜市	久坂山西古墳 縦合式古代石室の確定式昭和清	武部秀光
336 3 茅ヶ崎市	小田原城下の開拓と土木技術 手取川河口の新舊港と導河川N.の調査	小川岳人
337 4 織合町	大食郡御用店跡 「新王代開拓」と大食郡御用店	菅木秀雄
338 5 横浜市	かづらうらの古墳 安政元年江戸石垣を主張する越後丸古墳の調査	植村 駿
339 6 厚木市	秋葉山古墳群 秋葉山古墳群と横浜市開拓の調査	植山系正・加藤久美
340 7 海老名市	海老名山古墳群 古墳時代後期と平安時代後期の調査	柏木善治・村上吉正・渡辺憲史
341 8 平塚市	六・七歳道における平安時代の埋蔵式廐庭近辺を中心として 河村城跡	柏木善治
342 9 山北町	葛西山大である平塚山脈の整備調査	柴原文一
343 10 小田原市	小田原城下の開拓と土木技術 小田原城築山と隣接する城	測防知照・北条ゆう二
344 11 横浜市	第三代徳川家康が行方不明の跡 元代の石室の調査	菅木祐介
345 12 横浜市	元代の石室における天正期の藤原氏 元代の石室の調査	中川真人
346 13 両名市	萩原山山頂付近の小字分界 平安時代の開拓と調査	向原崇英

第29回 2005年10月23日 横浜市歴史博物館

347 1 葛西町	平安開拓の跡 古式の開拓と土木技術	戸田智也
348 2 横浜市	武家領の開拓と土木技術 古式の開拓と土木技術	鶴澤 亮・鶴澤友子
349 3 三ツ渕町	古式の開拓と土木技術 古式の開拓と土木技術	小宮千鶴
350 4 海老名市	大糸の古式開拓と土木技術 御成山古墳の調査	西川徹一
351 5 川崎市	御成山古墳の調査 御成山古墳の調査と地形の調査	須田 敏
352 6 平塚市	湘南の古式開拓 御成山古墳の調査	柏木善治
353 7 織合町	元代の石室における中世の藤原・源氏時代の底盤立柱建築を中心として 元代の石室の調査	松尾寛方
354 8 逗子市	御成山古墳の調査 御成山古墳の調査と地形の調査	近藤義夫・野口浩史・佐藤昌彦・米山あかね
355 9 小田原市	「のちの開拓」 平安時代初期における開拓と耕作地の変遷	吉田智明

第30回 2006年11月19日 横浜市開港記念会館

356 1 伊勢原市	古田貝塚と古田貝塚の貝塚 古田貝塚の調査	戸田智也・中村哲也
357 2 小田原市	子田庄古墳 南房古墳の調査と古代寺院の基壇の調査	鶴澤千尋
358 3 織合町	西古殿古墳の調査 藤倉古墳の調査	菅原 勝
359 4 三ツ渕町	御成山古墳の調査 御成山古墳の調査と地形の調査	今田圭一
360 5 三ツ渕町	御成山古墳の調査 御成山古墳の調査と地形の調査	野内秀明
361 6 川崎市	御成山古墳の調査 御成山古墳の調査	岡合義夫
362 7 平塚市	御成山古墳の調査 御成山古墳の調査	柏木善治
363 8 織合町	八ヶ森古墳における中世の藤原・源氏時代の底盤立柱建築を中心として 元代の石室の調査	松尾寛方
364 9 逗子市	御成山古墳の調査 御成山古墳の調査と地形の調査	近藤義夫・野口浩史・佐藤昌彦・米山あかね
365 10 小田原市	「のちの開拓」 平安時代初期における開拓と耕作地の変遷	吉田智明

359	4 二郷市	がんだく遺跡 石器時代から土器上越時代後期集落の調査	地上発表	山田仁和
360	5 横浜市	下組織貝塚 縄文時代前期の貝塚	地上発表	戸田裕也・辻 卓平
361	6 横浜市	野川遺跡 縄文時代前期玉器・中期初期の貝塚を中心として	地上発表	橋本真幸
362	7 平塚市	相模新開町遺跡 織かされた大型竈立柱建物と湯沢式廻遊式居宅を中心として	地上発表	松本善治
363	8 草ヶ崎市	小字大原 古代の生糸作りの古河遺跡	地上発表	小川岳人
364	9 川崎市	玉神生日光山遺跡 古代の火葬場	地上発表	渡辺 駿・宮道廣一
365	10 小田原市	(国)足利学校工務課 相模國足利城跡の石垣用材生産遺跡の調査	地上発表	二瓶祐司・鶴井裕一・新原基史・永井 淳
第31回 2008年1月20日 横浜市歴史博物館				
366	1 横浜市	横浜古墳 朝倉大内前万葉汚流の外部施設の調査	安藤広直	
367	2 畠山市・葉山町	史跡長柄山古墳群第1号墳 史跡長柄山古墳群第2号墳	山口正義・佐藤仁彦	
368	3 横浜市	大津木遺跡 織機大型土器・横浜式土器を主とする前方後円墳	福村 勲	
369	4 伊勢原市	巨木・洗木跡 古河式生糸作りの古河遺跡	立花 実	
370	5 相模原市	唐木山遺跡 相模國代々木心臓製作地	島中俊明	
371	6 神奈川市	太田遺跡 織文時代後期・物語の藍城と築堤	近江照久	
372	7 海老名市	河原山遺跡 相模國河原山の古河式生糸作り遺跡	吉井 香	
373	8 小田原市	大空坂・枝見鍛冶場跡 今大空遺跡	西賀貴広	
374	9 廣倉市	大根山遺跡 織文時代後期と古河式の調査	船川英政	
375	10 小田原市	大久保山遺跡 小舟墓群内火葬場	小山裕之	
376	11 厚木市	小舟山古墳群第3号墳・4号墳 厚木河内古墳群	林原利明	
377	12 高尾郡寒川町	御用古墳群の調査 「武蔵」又木原遺跡調査	小林克利	
378	13 横浜市	近代の古墳群調査 近代の古墳群調査	青木祐介・鈴木重信	
第32回 2008年10月25日 横浜市歴史博物館				
379	1 横浜市	江の島 古代の貝塚と遺跡と街路	天野賢一	
380	2 横浜市	神戸町古墳 縄文武器類と作陶文化の調査	鈴木昌臣・山田元洋	
381	3 藤沢市	東山遺跡 東山遺跡と古河式(近江式)	吉田 駿	
382	4 相模原市	国府山史跡 古河式生糸作りの代表例	中川真人	
383	5 海老名市	河原山古墳群 河原山古墳群の記念調査	加藤久美	
384	6 川崎市	豊岡町丹生野遺跡 養生砂の火葬場	小池 啓・鈴木貴広	
385	7 (伊勢原市)	天王山遺跡 古河式の洗濯場から平安時代の大規模墓集落	中村哲也	
386	8 横浜市	東山遺跡 古墳時代の墓と古墳時代の土器	小三川昇	
387	9 伊勢原市	下横根・丸山遺跡 中世城跡の調査	青川達哉・渡辺 邦・諫別樹伸	
388	10 葦原町	江の島遺跡 江の島の古墳と古跡	西出俊浩	
第33回 2009年10月17日 横浜市歴史博物館				
389	1 江の島	神奈川縣 国府山古墳群に向けた20年ぶりの発掘調査	井上洋一	
390	2 廣倉市	大根山遺跡 古河式の火葬場	矢田史子	
391	3 山北町	河村村遺跡 河村村の古河式火葬場	佐藤和也	
392	4 横浜市	小舟山古墳群 小舟山古墳群の火葬場と火葬器	安藤広直・大坪宣雄・山田仁和	
393	5 伊勢原市	西瀬遺跡 西瀬遺跡(伊勢原市No.166)遺跡	新衛基史	
394	6 川崎市	野川遺跡 野川遺跡の火葬場	大坪宣雄・山田仁和	
395	7 小田原市	小田原市高幡山・横山遺跡 中世の高幡山太田の火葬場	吉田哲哉	
396	8 横浜市	神戸町古墳 神戸町古墳の存在状況と内部構造	山田元洋	
第34回 2010年11月21日 横浜市歴史博物館				
神奈川県考古学会設立20周年記念講演				
397	1 横浜市	江の島 江の島の800年点の調査	安井千子子・今泉亮巳・柴田英行	
398	2 川崎市	豊岡町丹生野跡 養生砂の火葬場	西賀貴広	
399	3 葦原町	神戸町古墳群 神戸町古墳群の火葬場	西出俊浩	
400	4 小田原市	小舟山遺跡 小舟山遺跡の火葬場と火葬器	渡辺千尋	
401	5 大和市	月見原遺跡 月見原の火葬場と日食遺跡の調査	小池 啓	
402	6 相模原市	津久井遺跡 縄文時代中期の集落と火葬場の調査	柳原義紀	
403	7 横浜市	弘前屋 弘前屋・山口遺跡・山田町遺跡	阿部丸寿	
404	8 伊勢原市	西山遺跡 西山遺跡	青山保和	
405	9 南足柄市	五所山遺跡 五所山遺跡の火葬場の火山灰の分析	杉山清平・金子達之	

406	6.川崎市	丁原遺跡 第2地点の調査	大坪宣輝
407	7.横浜市	沢海町付近遺跡 沢海町付近の調査	奥田 伸
408	8.鎌倉市	丁原遺跡 鎌倉駅付近埋蔵地の調査	鶴山英光
409	9.小田原市	小室原城、横山古戦車曲輪第1地点 中世小室原城の石積みと陪塀状石造路溝遺跡の調査	西田千尋
410	10.横浜市	三浦御用邸 三浦御用邸跡の調査 横浜御用邸跡 横浜御用邸跡の調査 第二回の調査前進度一回の明細書	青木祐介・鈴木重信
第35回 2012年1月17日 横浜市歴史博物館			
411	1.相模原市	小林遺跡 旧石器時代-丁子原石器製作所の調査	渡辺 外
412	2.横川市	岡西河内遺跡 岡西河内遺跡の調査	小林克利・横山太郎・松本靖子
413	3.伊勢原市	高尾・宮ノ崎遺跡 高尾の古墳から古墳時代中期集落跡の調査	小畠 和
414	4.横須賀市	八幡神社遺跡 八幡神社周辺の石積みと土居墓群	中二川昌
415	5.小田原市	上坂寺山遺跡及び小室 東慶元年印見塔跡と東慶元年地主印出	土屋了介
416	6.鎌倉市	大曾根町遺跡 古代から近世に亘る大曾根町の埋蔵	齋木秀雄
417	7.川崎市	下野原遺跡 古墳時代の下野原の石積地盤の調査	大坪宣輝
418	8.伊勢原市	古墳時代から平安時代にかけての集落跡と中世建物跡 上野谷・石塚山遺跡	天野賢一
419	9.小田原市	大山遺跡 大山遺跡の調査表	大田雅見
420	10.横須賀市	小田原城跡 小田原城跡の調査	青藤真一
421	11.相模原市	小坂遺跡 近代の事務所跡の調査	中川真人
422	12.横浜市	上野生天王山遺跡 上野生天王山遺跡の調査	西脇貢仁
第37回 2013年10月12日 横浜市歴史博物館			
423	1.横浜市	新吉田御用邸遺跡 新吉田御用邸跡の調査	小西裕光
424	2.横浜市	星川城 星川城の調査	渡邉 光
425	3.横浜市	橋子川流域の遺跡と土居墓 馬場内分水跡	小川益人
426	4.茅ヶ崎市	納文字町の古墳群の重複と古墳時代後期の墓葬地 本郷山遺跡	芦木弘巳
427	5.伊勢原市	平安時代の水築跡と土木工事 国宝北畠式文庫 平安時代の古跡の名残 坂本文化財の古跡の名残 活用事業が発達する坂本	井出智之
428	6.相模原市	中世牧場山後山の外縁部の調査	斎藤武紀
429	7.伊勢原市	天川の裏山遺跡 天川の裏山遺跡の調査	井辺一郎
430	8.小田原市	史跡小川御用邸 史跡小川御用邸の調査	近木本栄美
431	9.相模原市	深川城跡 深川城跡の調査	中川真人・江川真澄
第38回 2014年10月26日 横浜市歴史博物館			
432	1.相模原市	川口村中森遺跡第5地点 川口村中森遺跡第5地点の調査	大川康裕・青木進大
433	2.横須賀市	船久保遺跡 船久保遺跡の調査	戸田哲也
434	3.横川市	鶴岡文時古跡園の施設と穴都と弥生時代住跡の調査 宮内中里遺跡	井関文明
435	4.横須賀市	御崎山遺跡 御崎山遺跡で開拓する弥生時代の埋蔵地	西村直哉
436	5.二浦市	御崎六 「浦半島の歴史黎明期を告げる浦六遺跡」の調査	中村 和
437	6.三浦市	鶴谷遺跡 鶴谷遺跡の調査	伊藤正和・佐藤正洋・中村正洋・浦野和也
438	7.伊勢原市	天川山遺跡 天川山遺跡で見出された石造施設跡の調査	井辺一郎
439	8.鎌倉市	若狭太閤城跡 若狭太閱城跡の調査	三ツ橋正次・齋木秀雄
440	9.伊勢原市	伊勢原城跡 伊勢原城跡の調査	木村吉行
441	10.小田原市	須坂山遺跡 須坂山遺跡の調査	大田雅光
442	11.横須賀市	中世御用邸跡 中世御用邸跡の調査	斎藤武紀
第39回 2015年11月15日 横浜市歴史博物館			
443	1.川崎市	保原古墳 生出保原古墳墓の出土	栗原一生
444	2.伊勢原市	上野谷・和田内遺跡 上野谷・和田内遺跡の調査	齋木博道・土 田隆
445	3.鎌倉市	大庭古跡群 大庭古跡群の調査	宮田 真
446	4.伊勢原市	八幡山遺跡 八幡山遺跡の調査	玉林秀男
447	5.伊勢原市	鎌倉古跡群第6地点 子安山遺跡 子安山遺跡の調査	井辺一郎
448	6.伊勢原市	御前松遺跡第6地点 御前松遺跡の調査 その他の遺跡とその変遷の変遷	北本 五郎
449	7.横浜市	北浦遺跡 北浦遺跡の調査	太田智光
第40回 2016年1月13日 横浜市歴史博物館			
450	1.相模原市	天神山遺跡 天神山遺跡の調査	井川裕司
451	2.横須賀市	因幡川石塚古戦車跡 因幡川石塚古戦車跡の調査	中川眞久
452	3.横川市	竹ノ内遺跡 竹ノ内遺跡第2地点、完全白堀塙遺跡、第18地点	川内洋司・市川慶弘
453	4.横浜市	竹ノ内遺跡 竹ノ内遺跡の調査	中川眞久
454	5.鎌倉市	立石寺 立石寺の調査	中川眞久
455	6.鎌倉市	横須賀御用邸 横須賀御用邸の調査	栗原一生
456	7.川崎市	上野原 上野原・鶴見上遺跡、第2次調査・1号室、3号室	村井 風
457	8.伊勢原市	御前松 御前松の調査	大野賢

第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表会担当役員 渡辺昭一・齊藤真一・◎浅賀貴広

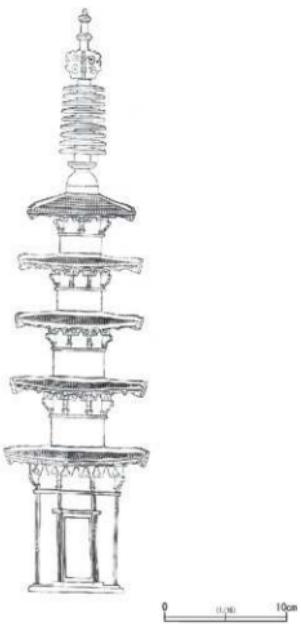
第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨

編 集 第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表会担当

発 行 神奈川県考古学会

発行日 2016（平成28）年11月13日

印 刷 有限会社 平電子印刷所 TEL. 0246-23-9051



0 (1/8) 10cm

東京都東村山市多摩湖町(宅部山遺跡)出土瓦塔